
メリーメリーX'mas

笠野芭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メリーメリーX'mas

【Nコード】

N4398C

【作者名】

笠野芭

【あらすじ】

とある運送会社の創設から繁栄、没落までを図らずも導いた老人が第二の人生として選んだのは、時代錯誤な紳士サンタクロース！？己の正体を悟った老人が即興で設けた有限会社に、屈折した因果と微々たる下心を要因に雇われる事となった並木隆慈。「他人に優しくなんかしてどうなる？」冷めきった隆慈は言い放つ。季節は冬へと移り変わり、凍てつく雪のように降り積もるシビリアな現実、次第に隆慈の纏う“心の外套”を剥がしてゆく……。 (寒さと温かさが溢れる一冬の物語。サンタに代わって届けます)

第一之譚：たゆたう水面と並木道（1）

【1 1】

誰かが悪意に吹いたとしか思えない木枯らしが、基より懷の寒い老人の体温を剥奪する。

つい先刻まで火照った顔を惜しげなく披露していた太陽はどういう訳か機嫌を損ね、いつの間にやら群雲のカーテンを見えない手で引いてしまったらしい。

比較的北東に位置する新潟の立冬は、絶えず生命活動を行使する血の通った有機物にとって歓迎したいものではない。

若者から『微妙』と酷評されそうな白髭を蓄えた赤いガウンの老者は、すっかり覇氣の失せた眼で流れる民衆の芥を物色するように歩いていた。

誰もがそうであるように、左右の足を交互に地に浮かせながら……。

見上げれば、駅の真ん前に立ち尽くす華奢な柱の頭部に値する勤勉な器械の針が、短いそれも長いそれも重力に逆らうのを諦め、いつものように“6”と“7”の辺りに停滞している。

月日にしる時刻にしる早過ぎるサンタの登場に、街を往来する似たり寄ったりな『大勢の一人』は、感激と解釈するには困難を極める怪訝な表情を老人に見せてくれる。

構わず……否、自覚していない老人は、見るからにリクルート姿の若者ばかりをせっせと黙視している。
当人はこの怪しい行為を“へっどはんていんぐ”と称しているが、彼のお目にかかる八割は若い女性のため、サンタクロースに扮した外観も累乗されて見るからに変質者だ。奇跡的にも公務員から職務を質疑されたことは十数回のみ。

これは一般論だが

充分、多い。

いつになく忙しない早朝の報道番組は、名の知れた企業の代表取締役の失脚から転落までを、事務的でドライな口調で国民に伝えている。
た。

会社が倒産したら正規の社員は可哀想だな。

家族とかも……。

不自然に小綺麗なりビングのソファに体重を預け、隆慈は平均的な面差しに相応しい虚ろな瞳を喋る薄っぺらい液晶の箱に向けていた。

あらゆる人物の声を真似る薄い箱は現在、生真面目っぽいキャストの声を必死で演じているようだった。

画面の主導権が姿なきスポンサーに略奪されたのを機に、隆慈は度の強い眼鏡のような妄想を放棄し、不意に手を伸ばした携帯の液晶画面へと両目を移行する。

登録名は
いがらし
五十嵐か。

題＞無題

本文＞おう！

リユージ様×様！！

相変わらずシャバの空気はオレを洗わせるぜ。でよ、今日もやるぜ！
えせ
！似非サント捕獲作戦・2。以下同文。

ガッコに例のアレ持参しろよ。頼むぜ色男！

ふう。

溜め息と同時に携帯をパタンと畳んだ隆慈は、何の兆しもなく耳許で囁かれた年不相応に甘ったるい声に発作的に反応し、即座にソフ

アーから離脱した。

『あら……かの有名なサントさんを虐めるなんて感心しないわね』

と隆慈の頭に余韻を残す声の主は、苦笑を払拭しきれず固まる甥^{おい}の顔をしかと眺めながら付け足す。

「勝^{かつみ}御くんからでしょ。仲良いのね。羨ましい」

「いや、それもこれも違うし。たぶん断じて」

無駄と知りつつ叔母の言葉を訂正する隆慈の背後では、再び主導権を奪還し画面上に舞い戻ってきた生真面目っぽい男が、人物の固有名詞に関する誤まりを訂正していた。

「ぬああにいい。それってどーゆー意味い!!」

真新しい校舎の一室で、政治討論番組さながらに喧しい口論が繰り広げられていた。

ここの生徒であれば楽に予測できる音響現象に、開閉式のドアを経由して窓際の席へと向かう隆慈は冷静な対処をする。

「あのさ。五十嵐は？」

「あー、隆慈才ハヨ。かつちゃんなら教員室。諸橋^{もろはし}んトコでしごかれてる。

てか見てわかんない？今こいつとバトル中なの。邪魔したら放課後付き合わせるぞ。もち、かつちゃんも“どーこー”だから」

教壇に隸従するパイプ椅子に奇天烈なポージングで鎮座する女子は五十嵐の彼女だ。大方、隆慈の予想どおりの返答をまくしたてた。「やっぱし？」

と、隆慈は無難な言葉を返すことで、短い会話に終止符^{しりょうど}を打つ。

前列窓際の席に苦もなく辿り着いた隆慈は微少な違和感を察する。藍色のブレザーに匿っていた携帯が主人にサインを送るっているっぽい。音もなく痙攣は、着信を暗示していた。

観念した隆慈は、ボタンの填めてないブレザーから携帯を探し当て、通話の催促であることを確認する。愛する自分を悩ませる登録名を頭から切り離し、隆慈は席を起立した。

気温の低下に伴い換気がおろそかになる香水臭い廊下を歩みながら、隆慈はケータイを介しての会話を承諾した。

「で、何？」

「とつてもだあくいじな用事を失念してたの。

あのね、帰りでいいけど、河島さんのところに預けてたスフレちゃん。迎えに行つて欲しいの。ほら、覚えているでしょう？

河島さん。

いつの日かお世話になった町内会の人。シャム猫を愛好していらっしやるマダムな方。よろしくお願いね」

プツン。

誰？

「つか、返事は……」

どうやら、用件を済ました叔母はとつと通話を遮断してしまったらしい。

婚期をさらりとひるがえした、今年で三十代の半ばに差しかかる独身OL

それだけが叔母の全貌ではない。

事実、直属の甥である隆慈も、彼女の盲目なマイペースぶりにはいささか閉口していた。それでも、近年ある事情から成立が危ぶまれている並木家にとって、有能で有望な働き手であるのも事実。

並木隆慈に

両親はいない。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（2）

【 1 2 】

立冬とは、十一月七日過ぎを指す季名だ。

つまり、

冬ではない。

その程度の言葉の綾など、この世界に十六年以上も滞在している隆慈の敵ではない。厳密には今が秋の暮れであることなど承知していた。

雪はまだ早い。早過ぎる。

教室では、現在進行形で国語の教師が詠う何の変哲もない詩歌をよそに、教室の在るべき座標に位置する大多数が窓を静観していた。

雪だ。

窓際の男子が、視覚で観察できる事象を喉と舌で紡ぐ。少し遅れて、教壇付近に佇立する諸橋の不愉快な表情が傷んだ教本の陰から露になった。

「ん……もう立冬なんだ、降りたい奴には降らせておけ。それが仁義つてものだ」

後半意味不明。

隆慈を含めた三の九乗は、教員諸橋五十歳の錆びれたジョークに対する免疫はとうに完成させていたのだ。

……………無視。

「なんかさ、今年の冬って来んの怖くない？ゼツタイさあ、そのうち死ぬほど寒くなるって。

あたしさー、冬眠しようっかな。きやはっ

「なにーそれ、マジウケるんだけどぉー」

場違いかあるいは適当なのか、教室の後部座席で両手をぱんぱんと叩いて笑う女子二名。

しかしそれも、永劫の“時”の寿命と比べれば刹那。教壇から二人に浴びせられる無言の憤怒を感知した以後、炭酸の抜けたコーラのように大人しくなる。

実際に、二人は肌がやたら黒い。

「続ける……………」

渋い諸橋はさしずめ烏龍茶といったところか。

一連の茶番を傍観しつつ、隆慈はこの状況に対してあくびが出るかどうか試していた。

放課後。隆慈は想定していた馴れ合いを早々と辞退し、学校一の変わりダネと各所で噂される友人　五十嵐勝御のもとへ自主的に赴く。

やはり予想どおりの場所に彼は居た。

「なー。おっちゃん機嫌悪くねえ？」

「なんとも……」

『学内に設けられた屋外』へと到るための窓口に、遠目でも体格が良いことが観察できる男子生徒が、萎えていた。

隆慈の気配に気づいたのか、カップ麺のように即席した友好的な笑みを対象物に向ける。

五十嵐だ。

その様子から、諸橋に解放されたのは数十分前と思われる。今は、連続性を疑うコンクリートの段差に腰を置いていた。

彼に関する詳らかな解説は野暮なので、省略。

「そおかあ？」

オレが親戚だからってありや度が過ぎてるっつーの。体罰ヤバいんじゃないの？よう知らんけど」

この五十嵐とあの諸橋は親類だっけ……。

改めて再認識するDMAの執念に感心しながら、隆慈は意識して彼から横幅二メートル離れた二段上の人工的な隆起に腰を落とす。

「サン…タさ、もうほつとかない？」

つか、ほつといても無害だし」

ごく自然に提案した隆慈に五十嵐は、

「ダメっしょ。奴…、似非サンタの実体はオレらが暴かんと迷宮入りしちまうぞ！ヤだろ？リユージュ的に」

「いや、嫌じゃないし」

即、否定。

隆慈の意志はめっぽう強靱なのだ。それを知ってか知らずか、五十嵐は言い淀むことなく、

「困るだろお前。つーか困れ」
と追撃。

友人の猛攻に呆れた隆慈は無言を維持しつつ五十嵐に背を向けた。

意味が解らん……。

「おおっと……ちよいちよい、わあった。わあったから待ちんしゃい。な。好きだろ、テリヤキバーガー？」

段数は短いが横に幅のある階段を上がり終えた隆慈は足を止める。
別にテリヤキバーガーごときに動揺した訳ではない。

居たのだ。そこに。

楚々とした佇まいで、落ち着いた深い藍色の制服を着こなす女子が

……。

確か下級生のはず。ってことは、一年生？

「何か用？それとも後ろの男に、とか？」

いつもの調子のいつもの声音こわねで無難に尋ねた結果。事前に用意していたらしい台詞をソプラノに準ずる音域で発声する。

「並木くん。ちょっと……、いいかな？」

見事な上目遣い。不思議と腹は立たない。

名も知らぬ新人女優の演技がどこから撮影されているのか気になった隆慈は、自分を凝視する共演者二名を意識の隅に置きながら周囲を洞察する。

少なくとも、大がかりな機材は確認できない。

「ここじゃ、ダメ？」

縦横無尽に稼働する視線を少女の両目に戻し、隆慈は提案する。
イジワルな返答であることを自覚しつつ。

「え……！でも……」

隆慈の背を窺いながら下級生はそう呟く。

隆慈の認識では、背後で薄ら笑いを浮かべた不良が好奇の眼差しをこちらに向けているはずだ。

目前の下級生に暗黙の同意を求められた隆慈は、しかたなく順当な結論を提示する。

「あのさ、グラウンドのベンチでいい？あれこれ近いお陰で、サッ

カーやってないっぽいし」

毎度の学力検査が近い。成績によっては、いわゆる『留年』という事態に陥る。

「んと……いいですよ。と言うより、わたしもそこがいいです。はい」

何を勘違いしたのか。

隆慈の使う『いい』は、普遍的に用いる『良い』とは極端な差異がある。どうやら、隆慈の妥協は綺麗に誇張されたようだ。

「あの……どうかしました？」

そっぽを向いたまま微動だにしない隆慈に不安を感じたのか、下級生は先輩に問う。

事理に疎い隆慈とて、状況を理解、把握するのにさほど時間を要しなかった。

三人の頭上では、

銀灰色の空のから忘れていた雪の続きが、地上へと舞い降りていた。

文字どおり、似ているようで非なるサンタクロース　似非^{えせ}サンタ。
巷の若い衆（これには小学生も含まれる）の間ではすんなり通じる
それが何を指すのかと問えば、意味のある解答は以下に絞まれる。

新潟の街を闊歩するコスプレじい。

英会話の講師で、生粋のロシア人。

薬物依存の変質者。

サンタクロースの末裔だが、ただそれだけ。

と。人の想像力が成し得る幾多の仮説が唱えられてはいるが、隆慈
の知る範囲では未だに真相には行き着いていないようだった。

「連絡事項は？」

「ない……」

人気^{ひとけ}の失せた校門に仁王立ちする五十嵐の脇を器用にすり抜け、隆
慈は栓のないジヨークを蹂躪^{じゅうりゃん}した。

「ちやうって！報告、報告。お前ってホント冗談つーじねえなあ…
…」

「じゃあ、通じる奴とつるめば」

得意の正論攻撃。

しかし五十嵐はかなりの強敵だ。この程度では無傷であろう。

「だからさッ、オレは隆慈のこと好きなんだよ！まじまじで」

「……………」

唐突に訪れた友人からの告白に、隆慈はしばらく沈黙する。数秒と経たず、躰は歩行を中断した。

「いや、同性に告られも嬉しくないし。……異性でも困るときもあるけど」

そのとおりだった。

「おいおい。漢^{おにい}としてだろーに、オ・ト・コとして！！
気づけ、そんぐれえ」

五十嵐は言いながら、先に行く隆慈を追い越し、電柱の側で踵を返した。

傍らにそびえる高級マンションの住人が、何ごとかとベランダごしから顔を覗かせる。更年期に悩まされていそうなオバサンだ。

隆慈はすみやかに目を逸らす。

冗談が通じないのはどっちだよ……。

「で、どうすんの？似非サンタ」

隆慈はこの人物に相応しい話題を振る。

意表を突かれた五十嵐は、

「もち！作戦実行だ。

この前は駅んとこで見失っちまったからな。今日こそ積年の激闘にケリ着けっぞ」

と、意気揚々。

彫りの深い横顔には、陽光を反射したピアスが燦ざめく。

そういえば、雪……止んでる。

うざったい前髪をふるふる払い、隆慈は陽光の指す方角を見上げると、いつもの眩し過ぎる顔がそこに在った。
安堵。

「報告……まだじゃね？」

肩越しからふざけた五十嵐の声が聴こえた。ここは、根負けしてみるのもいいかもしれない。

「相談」

と一言だけ。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（2）（後書き）

こんな感じでちまちま贈りますです。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（3）（前書き）

余談ですが、作家業に関する技術は独学（開拓に近いかな？）です。弱冠十七歳が描き綴る支離滅裂なようでそうでない近代文学。どうぞ。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（3）

【 1 3 】

昼食タイムを過ぎ急速に出力の弱まるオフィス街で、齋藤善則は失意の底にあつた。さいとうよし のり

今、世間を不謹慎にも賑わせる政治家汚職事件の片隅で、基より時勢の影響を受け易い中小企業は、疑心暗鬼になりつつあつた。

以前、齋藤が勤めていたイベント仲介会社とて例外ではなく、日頃から凡ミスの多い齋藤を見る目は当初の蔑視から、日を増すことに辛辣な睥睨へいげいへと変わつていくのを齋藤は肌で感じていた。

それでも会社では若輩の部類に入る齋藤は、持ちまえの若さで憂鬱を払いのけ、努めて快活に振る舞つてはいたものの、何の前触れもなく部長から『明日から来なくていいぞ』と、鋭利な字で退職金と添えられた封筒を差し出されたときには、さすがの齋藤善則も気が滅入つた。

褪せることなく苦い回想に蓋を閉め、その手の漫画から箸でつまんできたかのようなサラリーマン風の好青年は、現実に戻す。

さて、どうしたものか。

溜め息の副作用でずれた縁なし眼鏡を神経質に左手で正した斎藤は、定位置に戻りかけた腕を寸で止め、再び鼻先まで連れていく。

「まだ十四時五十二分。どうしようかなあ……」

ふと目に付いた駅前の某ハンバーガーチェーン店の効力が、何時間
も忘れていたままの空腹を斎藤に思い出させたが、周辺にたむろす
る高校生の男女数人にじろりと観察され、路上に立ち尽くしていた
彼は足早に撤退する。

平日の午後に高校生？

テストが近いのかもしれない……。

？！

小学生？

そう、赤いハッピを纏う十歳ぐらいの少年がそこに居た。

どう見ても、着せられている感のあるハッピだ。サイズが小学生の
背丈には大き過ぎる。少年は、非車線のショッピングモールの路上
で健気に広告らしきチラシを配布している。

ボランティア活動の一貫だろうか？

にしては、独りで、というのも妙だった。

性急な認識をした斎藤は別のルートを選択するべく右折を試みるが、
長年押し込めてきた知的探求心から予想外の妨害を受け、無意識に

目標物の在る方角へと九十度方向転換する。
並ならぬ速度で接近する男の気配を察したのか、ハッピーの少年は視野の中で肥大化する斎藤を直視する体勢をとった。

対峙する、

斎藤とハッピーの少年。

「もしか！依頼の相談だった？」

先に言葉を発したのは以外にも少年だった。

このぐらいの年頃の子供はある程度は人見知りするものだが……。

無論、斎藤の偏見だ。

自分がそうであつたから他人もそう。

「依頼??？」

えっと……そうじゃなくてさ。君……小学生だよ。何してるのかなあ？お母さん……いや、友達は近く？ボランティアは良いことだけれどさあ、独りでっていうのもアレじゃないかなあ。

あ、ごめん。アレって言うても小学生にはわからないよね」

胡散臭いほど口調を優しく加工したつもりだ。

が、少年は可愛らしい口許を不適に吊り上げ言つてのけた。

「ふふん。そういうことかあ……」。

おじさん。今、失業中でしょ？そーゆーことなら早く言ってくれなきゃダメじゃん。今さー、ウチの会社では人手がガラ空きなんだよ

ねえ。

あ……っと、ウチつてのは僕んちのことで一人称じゃないよ。ご注意」

「……………」

言葉を失うとは、まさにこのような状況を指すのだろう……。心底投げ遣りになった斎藤は、得意げに微笑むハツピの少年にどういう訳か微笑み返さずにはいらなかった。

周囲から明らかに浮いた珍妙な会話を展開する二人を置き去りに、時間は街を往来する人々と共に通り過ぎる。

空は、依然として蒼い。

「お前の言う相談ってどんだけえー。なあ、親友としてだんまりは

よろしくないぞ。

そうそう、テリヤキバーガー好きだろ？ほら、リユージュ的に」

またそれが……。

目的地への長いが険しくもない道のり。五十嵐はずっとこの調子だ。

「だから、問題の共有」振り返っての一言。

それ以上でもそれ以下でもない。隆慈はいかなるときも素直だ。

「ちやう！オレが訊きたいのは内容。ずばり脈ありかどうかだ。

かなりの上玉だぜ……、ありやあよ。オレはさ、リユウちゃんが心配。」

両腕を機敏に動かし返答を促す五十嵐の声を空返事でやりくるめながら、隆慈はほんの数十分前の談話を想起していた。

「実はね。相談……なんですけど」

親しみの色が濃い語尾と無器用な敬語が化学反応でも起こしそうだ。

隆慈の場違いな妄想をよそに、下級生は続ける。

「離婚しちゃうかもなんです！」

「は？」

意味が判らない訳ではない。なぜそれを自分に言うのかが解らない。

「いや、なんで……」

当然の質問。

「えっと……どう言ったらいいのかな。

夫婦の会話が減ってきてるって言うか……。前はこんなじゃなかったのに……」

そう言い、やたら長いまつげを伏せる。

つか、そっちじゃないし……。

隆慈が尋ねたかったのは、なぜ自分に離婚の件を話すのか、といった素朴な疑問だが、またも綺麗に誇張されてしまったようだ。単なる無念で終われば良いが……。

「いやさ、それって普通だと思うけど。夫婦ってそんなもんなんじゃないかな……。」

それより、どうしておれに親の離婚とか告げるワケ？それにはもつと他に適任いるんじゃない？」事実、隆慈はそう思った。

一般的に夫婦の仲は冷めるのが普通だし、だからといって関係が破綻するとは限らない。ついでに、適任する相談相手とは身近な大人か学校の先生が順当な線であろう。婚歴おろか人生経験も浅い高校生に相談する内容ではないはず。ましてや赤の他人。しかも上級生

の男子に対してだ。甚だしいにも程がある。

「え……それは、あの……わたし……並木くんがそういう境遇だつて聞いたから……。それで、つい……おんなじかな……って」木材で構成されるベンチにちょこんと座る少女は、もじもじと言葉を繋ぐ。

何が同じなのだろうか？

もはや演技ではない女優の言葉に心中で疑問符を打ち、隆慈は彼女が知らないであろう正解を発表する。声は微妙に苛つきを含んでいた。

「いや、離婚じゃないし……。しいて言えば蒸発。夫婦揃って雲隠れ。

それでも連絡は寄越す。どういう見かは知ったこっちゃない。つか、どうでもいいし」

ベンチに両手をつき空を仰ぐ隆慈の傍らで、下級生は憂いを帯びた瞳で同情を訴えている。

隆慈に、それを受け止める気は毛頭なかった。

……今日はやたら胃がむかつく。

ドラマのワンカットのような回想に舌打ちをして、隆慈は喉の奥で悪態を吐いた。

隣に行く五十嵐は、終始ご満悦の様子で特大のハンバーガーを頬張っていた。得意の歩き喰いだ。

「でよ、そのコ名前なんつってた。一年生だろ？オレらの学年にあるな。ピュア残ってんのいねーし。やっぱ、リュウちゃんが心配」

必然的に籠った声でくつちやべる五十嵐の不躰さに呆れつつ、隆慈は歩きながらの応対をする。

「訊かなかったから知らない。興味あんなら調べれば」

「な？！バカ言うな！！そうゆーんじゃねえ。

オレにやあチカがいるしな、あんな眼中にねえよ」

「あつそ。それよかどうか？似非サント捕獲作戦。やめんなら、おれ帰るけど。用事あるし……」

「“2”だろッー。

作戦はもう第二段階。奴の行動パターンはオレ様の頭にある。後は現場を押さえるだけっしょ！すぐ終わるって」

子供のようなことを言う五十嵐の声色は、元の響くそれに戻っていた。

「そのパターンってのは駅前英会話だろ。それって夕方じゃなかったっけ？

なら、まだ早過ぎ」

指摘する隆慈の視線の先にはイングリッシュな看板。視線に追従した五十嵐の顔も、今は英会話塾に向けられている。

「なありユージ。……用事って、何？」

そんなことまで訊くか？

普通……。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（4）

【1 4】

二十畳あまりは優に越えるであろう部屋で、質素を装いつつも高級感を隠しきれない家具たちが計算された配置で内装の一部に取り込まれていた。

目につくあちこちらから、獣の爪痕に酷似したひっかき傷が無力な来客に畏怖の念を誘発している。

隆慈は諦観に濁った昏い瞳をテーブルに陳列するショートケーキに向けていた。数は半端じゃない。

「……………それでねえ、お宅のスフレちゃん捜しましたのよお、わたくし一人で。ね、考えてられる？一人でよ、一人で。もう途中でくじけちゃって、お宅に連絡しようかどうか迷想しちゃいましたのよ……」。

それでも、責任は少なからずわたくし側にあるんですから。なんかもう少し頑張ろうかしらって、決意してみたりしちゃったりして。オホホホ……」

つか、連絡しろ！

うちなる焰ほむの消火作業に精を出す隆慈の眼前、否、テーブル越しに、皮下脂肪の陰の団結で膨張した膝の上にそれなりに重量のありそうなシャム猫を抱えた、“いかにも”なマダムが居た。

件の“スフレちゃん”を回収しに叔母より不本意にも仰せつかわれた隆慈であったが、妙に詮索を拒む記憶と格闘し行き着いた矢先、待っていたのがこれだ。

できれば交わることを避けたい甘味な洋菓子の出現や、一般に世間話と美化される無駄に長くつまらない自己完結式の談笑はまだ我慢できる。だが、人一倍煩わしいことを嫌う隆慈には、端的に済むはずの事項の予想外の発展は決して耐えられるものではない。

暖房の利いた生ぬるい洋風仕立ての居間で、隆慈は単純に困っていた。

午前のうちに積もることなく消えちまった短気な雪。あれは何だったんだ……。

五十嵐勝御は、ありふれた街のありふれた街路樹に寄りかかり、物思いに耽っていた。用件を済ませたいと頑なに主張する隆慈としぶ

しぶ別れ、作戦の延長を余儀なくされた五十嵐は、電話で近くにいることが判明した『カノジョ』との待ち合わせのためこの場所を指定した。

チ力は時間に対してのルーズさを好まない。もう数分も経たずにこの場に現れるのことは、五十嵐のなかでは確定している。
今日こそハッキリと表明しなくては、

好きなヒトが他にいることを。

「あつ！居た居た。かつちゃん発見！」
と、後方より聴き飽きたハスキーボイス。

チ力だ。

いつものフランクな笑みを即席した五十嵐は、後方から近づくチ力と向き合うべく軀を反転させる。数あるボーシングのなかから『片手にお盆のウェイター』を抜粋した。

「おう！待ったぜえ、軽く五、六時間。
ずばり、次元を跨いで恋人を待つカツミイガラシ」

「おーげさあゝ。てゆうかさあ、ばればれ嘘だから！」

すかしたウェイターのジョークをしなやかに受け流し、敵宮チ力は頬にえくぼを刻む。

てつきり制服のままかと想像していたが、今のチ力は黒、緑、紫と

重ね着した私服姿だ。五十嵐は、質問を抽象的に投げかける。

「ありや。私服？」

「それってさあ、ケータイで話したじゃん。いま智子たちと遊んでるから……」って。智子と、つったら私服率かなりでつしょー？」
初々《ういうい》しいアクションを交えてチ力は主張する。

どついう理屈なんだか。これだから女は好きになれない。いや、仮にも付き合っている訳だから矛盾するか……？

なにげに自問自答する五十嵐の脇で、健康的に日焼けしたチ力は陽ひにも劣らぬ燦々とした笑みをたたえていた。

空は、再び暗雲の陣を組みつつある。

モンブランのせいで、なおさら胃がむかつく……。

マダムによるマダムのためだけの一時間にも及ぶ長話と、もろクリームなケーキシリーズよりは幾分マシかと選択したモンブランとの思わぬ接戦を乗り越え、隆慈は念願の釈放を勝ち取った。

今、隆慈はげんなり萎縮した心を抱えて、魚のアートが印象的な歩道橋を渡っている最中だ。そんなこと、さして意識するほどでもないが……。

軀のどこかに内蔵している時計を信用するなら、時刻は四時半ジャスト。隆慈は確認のためブレザーから携帯を摘出し、非節電で発光する側面のウィンドウを覗く。

「四時半か」

誤差はたったの二分。

隆慈の認識では、機械はたまにしか嘘をつかない。

故意による落下防止のためそこそこ背のある枠組みに腕を乗せ、隆慈は陸の水平線を眺望する。

ともあれ、直線上の数キロメートル先に位置する赤茶けた巨大な建造物 気象予報センターの出現によって、それは無惨にも遮蔽されてしまったのだが……。つい最近のことだ。何カ月前だったかは覚えていない。どうでもいいことだ。

どうでも……。

「うし。捜すか」

しばらく茫然と視覚からの情報を放棄していた隆慈はそう言い、歩道橋の一部を突き放す。

できれば陽が暮れる前に搜索を終えていたい。もちろん小さな逃亡者を捕縛したうえでだ。

逃亡者の名はスフレ。それは、隆慈の嫌いな洋菓子と同じ名だった。

今月の天候はアメダスじゃあ読めない。

誰かがそんなことを言っていたのを白樺しらかはゆつや宵夜は思い出す。

インターナショナルな最新情報が常時錯綜する気象予報センターの疎外された喫煙スペースで、宵夜は煙草を助手に頭脳を稼働させていた。不言の煙草は考察には適任の助手と言えよう。傍らには、コーヒーを主に取り扱う自販機の姿。

いつからそこに居たのか？

たぶん、自分がここに転勤する以前からだろう。

雑念の介入により思考の本筋から脱線した宿夜は、ガラス越しで慌ただしく専門用語を連呼する同僚たちを視界から除外し、その狭間に映るもうひとりの白樺宿夜をまじまじと眺めた。

光沢のない黒いスーツに収まる長身。

線の細く、それでいて滑らかな顎と眉。

睡眠不足が原因で二重に演出された目元。

額にかかるのは、若さを象徴する清潔感のある髪。

そう、透明な障壁にトレースされているのは、紛れもなく、氣象予報士の白樺宿夜。

「さて、仕事の続きだ」

誰にともなく呟いた宿夜は、生涯の役目を終えた煙草を専用の墓地灰皿に葬ってやった。

「そうゆーワケ……って、どーゆーワケ!？」

「いや……だからさ、好きな奴がいてさ、それでさ……。わかつだろ? そうゆーうやむやにしたくない気持ち……」

「わかんないっ! わかるワケないじゃん!！」

某所の洒落たカフェ。そのから空きの店内。

第三者が耳にしても、若いカップルの一方が別れを切り出す場面であると容易く察することのできる光景が、人知れず展開していた。

「おい……泣いてんのか?」

あからさまに俯いて沈黙するチカの様子に、堪らず声をかける五十嵐。

チカは俯いたまま首を左右に数度振り、『大丈夫だから』を暗に伝える。

「……オレが全面的に悪いんだしな、奢るよ。好きなもんじゃんじやん頼め。マンゴーパフェとかなんたらケーキとか」

「もういいから!！」

言葉は遮られた。

怒声と同時に席を立ったチカは、涙腺からもたらされた水滴をその場に残し駆け足で店内から退く。逃げるように……。

水滴と共に取り残された五十嵐は離脱していた席に力なく癒着し、窓から等身大で見えるチ力の去り行く後ろ姿を目で追っていた。両手で顔を覆うチ力は減速することなく横断歩道を駆ける。

信号が青で良かった……。

そんなことしか思いつかない。

“心”という架空の臓器が融解したことで、五十嵐の躰の大部分は壊死してしまったようだった。

隆慈が路駐された自動車の下腹部を覗き見るタイミングを図っていたところ、どこぞより馴染みの違和感が発生した。

メールの着信っぽい。

目標物から躰の向きを逸らし、隆慈は携帯の液晶画面を視界に固定した。

題>チ力からの命令！

本文>今近く？

あいつのことでリュウジに聞きたいことあるんだけど。いいよね？
もち、メールでは厳禁。とりあえず場所だけ書いて送って。

うげ……。

たかがメールの文章で剣呑な雰囲気を感じた隆慈は、露骨に嫌な顔をする。

どうやら、面倒と難儀は累積する性質らしい。

「……………」

一時は携帯を畳み、しばしの逡巡に揺れていたが、決意したように再び問題と向き合う。

自分が現在位置する地理的な座標。自分が今遂行しなければならぬ義務の概略。

それらを淡白な文字列にアナログ化して、
返信

任務完了。

隆慈は声にならぬ声もどきで、自我にそう囁いた。

十三分後。

歩道橋の上で時間を持て余す隆慈の視界に、颯爽と畝宮チ力が降臨した。と言つても、律儀に階段を駆け登つて、だが。

「はぁ……ふう…、ちよつと、フリーズ。タンマ。走つて……来たから」

言いながら、内股に屈めた膝に両手を付き、努力家な肺の呼吸を調律する畝宮。

歩道橋にもたれたままの隆慈は、無言でその様を見つめていた。

自分に気を遣つて走つたのだろうか？

……あるいは、意味もなく走りたかつただけなのかもしれない。

隆慈がそれこそ意味のない考察をしている隙に、畝宮は呼吸の調律を終えたようだ。証拠に、調子が良好っぽくなった喉を機微に震わす。

「あんたつてコトバ濁すの得意みたいだから、ここは単刀直入で勝負するから……」

勝負。と、きたか。

今風の女子高生には相応しくない煮たぎった眼光を迷惑そうに受け止め、隆慈は彼女の口から放たれた言葉を反芻する。

僅かな間を置いて、畝宮は本題を告げる。

「さっきさ、かつちゃんに振られちゃった……。好きなヒトいるから……。って。カノジヨのあたしじゃなくてだよ。誰だよそいつって思うでしょ？フツー。……教えてよ。あんたらって妙に仲イイじゃん。知ってんでしょ？ねえ、教えてよ！」

言う畝宮の視線は隆慈のそれを捉えて離さない。後半は、行き場のない憤慨が声色に混じっていた。

「……あいにく」

失礼と配慮して体重の支えを断念した隆慈は、そう答えた。

沈黙が持続する。

幸運にも、この時間帯に歩道橋を利用する歩行者はまんざらでもない。もつとも、遠慮もあるのかもしれないが。

「……………そう」

下降するトーンで畝宮は言った。アクセントは実に曖昧。

程なく眼光の呪縛から放たれた隆慈は、不覚にも軽率な溜め息を漏らしてしまう。つい、だ。

しかし、今の畝宮には聴こえてはいないらしい。何やらぶつぶつと

独り言に夢中だ。見た感じ。

いかつい巖いわおのように対処困難なこの状況に嫌気がさした隆慈は、とりあえずの幕引きを催促することに。

「勝負はドローってことで、おれはアレ捜さなきゃなんないし」

件の“スフレちゃん”を済ませなければならぬ。

両親の蒸発によって自動的に託された『飼主』の称号。

今となつてはアレの保護者は隆慈なのだ。いかに淡泊で薄情な隆慈とて、義務となれば話は別だ。

「そういうことで……」

基より無関係な演目の幕引きを確信した隆慈は、拳動なく佇立したままの畝宮に背を向けウォークを開始する。歩みながら、急に寒さを思い出し両手を擦り合わせていると、

「猫でしょ？ 捜してんの」

と、畝宮は澄ました声で言った。

隆慈はやもなく後方を振り返る。この展開は、何か嫌だ。

「ああ……名前とか訊くなよ」

畝宮との距離は割とある。それがいけなかったのか

「あたしも捜すから！！！」

叫んだ。

そう言ってもいいかもしれない。指は、なぜか隆慈に突きつけられていた。

探す から？

『から』とは、何なのだろう？ 『から』とは？

前から違和感があった。

が、どうでもいい。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（4）（後書き）

比喩ですが、ようやく雲行きが怪しくなってきました。それに伴い対文章の持久力も右肩上がりな予感がしますので、今後の場面×2の尺もそれとなく延長されそうです。ええ、ご心配なく。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（5）

【 1 5 】

季節の支配が等しく侵食する並木道で、白樺灯しらかはあかりは不意に足を止めた。

普遍的な秋の装いが妙に懐かしい。

迂濶にもこの近辺を閑寂と口にしてしまったら、声の主がよそ者であることを露呈することになりそうだ。別段、ひどく寂れている訳でもない。灯には新鮮なのだ。列島の首都圏での記憶しか明瞭に刻んでいない灯には……。

懐かしい。

なのかな？

思い、僅かに微笑んだ灯は、両腕に抱いた極彩色の花束を赤ん坊を扱うように持ち直し、再会へと到る一步を踏み出す。そのあとを大型犬が無言で、貴婦人さながらにとろとろと続く。

年いかぬ娘と成熟したメス犬。

郊外の並木道を行く二人の淑女は、ひとつも言葉を交すことなく黙々と歩む。

「おや、あかりちゃんかね？」

背後から老人特有のしゃがれ声が飛んできた。何を隠そう自分に。

振り向き気づく、男性だ、と。年輩の方だ。

「あの……どうして？」

どうして判ったのだろうか？ 灯には不思議だった。

可憐に首を傾げ問う灯に老人は、

「ほれ、そのでかいの。クラ……なんたらレトリイバアじゃろ？」
老者が声と指で示すのは、灯の伴う貴婦人ならぬ貴婦犬

「クラウディアです」

灯は微笑を強めて彼女の名を正す。貴婦人の名前は、決して間違えてはならない。

「そうかそうそう、クラウディア……ね。あかりちゃんがまだ小さい頃から着けてたしのお、そのコチュジャン……じゃたっけ？」

「カチューシャです。ええ、たぶん着けてました。このコ、装飾品を着けていないと吠えるんです。すんごく。
着けていさえいれば、いっさい吠えないんですけど……」

質す老人に、正す少女。朗らかな光景は拗れることなく続く。

「ほう……変わった気質じゃな。わしの連れ合いと似ておる」

言いながら、灯……というよりクラウディアとの距離を埋める老人。

めっぽう長引きそんな談話を覚悟して、灯は近場の屋根つきベンチにちらと老人の視線を誘導する。

「おお、気づかんで悪いのお。重いじゃろくに、その七夕^{たなばた}」

言葉の誤りには気づいていないようだ。呆れながらも顔は微笑を維持しつつ、

「花束です」

と一応訂正しておく。

犬ながら、長丁場になる確率でも導いたのだろうか。貴婦犬クラウドディアは鬱とした目を主人の灯に向けていた。

空は、どうやら宿泊の荷支度を始めたようだ。

黒を基調とした、さしたる特徴もない三毛猫。ついでにオス。

隆慈は、逃亡者スフレに関する粗末な情報を首脳会談を通さず一人の女性に公開したのち、自宅周辺の管轄区域を巡察していた。

自慢するには相手を選ぶ必要がある隆慈の微々たる知識では、猫っぽい動物の本質上、彼らは記憶の中枢に緻密な地図を作成する行いを業と捉えているはず。彼らの本当の生業^{なりわい}は狩猟であって、豊かに栄えた種族の荘園に幽閉されることではない。

五時半を過ぎた頃、新潟の地は強制的に太陽の援助を絶たれた。性急な夜の訪れは死の季節が近い証拠だ。

自らに課した制限時間を優先して、隆慈は畝宮チカとの合流場所へ脱力感と共に赴く。

自分を億劫にさせる原因は何なのだろう……。

答えが出せぬまま、隆慈はやたら長い名称の公園へ辿り着く。

園内を水銀灯が仄かに照らす。

ぼうつと眺め、

嫌いじゃないな、と隆慈が感慨していると。

「夜間に待ち合わせ……ってさあ。なんか初心を思い出すよねえ。ねっ、りゅーじくん」

「まだ夜じゃない」

隆慈は驚きつつもとつさに言葉を返す。

ポーカーフェイスはおそらく成立してないだろうが、立ち位置から計算して木立の翳りを浴びてるはず。……たぶん、問題はない。

自分はいつから人の気配にこうも鈍くなったんだか。否、人だけじゃない。己の意思で動く物体にだ。

「夜、だから。だってこんなに暗いじゃん」

言いながら、畝宮は公園を一望する。骨の芯まで馬鹿そうな顔は相変わらずだ。彼女の周りに蔓びる男子には『ウケ』が良いが。

同意を求める畝宮の視線を軽く受け止めたのを機に、隆慈は木立の

翳りに頼るのをやめ一歩踏み込む。

「陽が落ちたからな……。これじゃあ黒っぱいスフレ捜すの無理だし、終わりな。共同捜索タイム。勝手に帰れば」

そっけなく伝えるべきことを伝えた隆慈の表情は軟らかい。意識して軽飄に振る舞った。

逃亡者はそのうち自首するもんさ　と目で暗示する。

思慮分別ある隆慈の気づかいを知ってか知らずか、

「そつ。じゃ勝手に捜索続行するから」

などと脳天気になめかした畝宮は、背と尻の中間で両手をイチヤつかせながら園内を散歩し始めた。

「捜すつて、どこを？」

惚けた口調で、隆慈は皮肉への伏線を張る。

「決まってるじゃん。ここら。てきとーにキヨロキヨロしてたら見つかんじゃない。相手はただの猫でしょ？」

意味不明なモーシヨンはそのまま、顔だけ隆慈に寄越している。

罨にかかった

「そうやって見つけたとしても、他人の家の敷地内や路地に逃げられたらどうする？堂々と入り込むのか？」

それとも御免くださいか？

今は夜なんだろ？

近所迷惑なんじゃないか？

……それに、暗いから危ない」

皮肉ゆえに“らしくない”饒舌が、並木隆慈の口から畝宮チカの耳

へと疎通された。……たぶん。
言葉が終わる寸で敵宮はすべてのモーションを停止し、急遽、隆慈
に対する臨戦態勢へとシフトした。要するに、接近。

「……………」

一メートル足らずの至近距離でだんまり。こういった状況には二、
三步後退するしかない。

「は？つか、何？」
と、隆慈。

しばらく隆慈の瞳を黙視したあげく、敵宮は残念そうに言った。
「あーああ、あたしやっぱあんたのコト好きになれそうもない。容
赦なしだから……あたしみたいなオナナのコに対しても」

と、いうことらしい。それは良かった。

声にならぬよう言葉をどこかへ還元し、隆慈は胸を撫で降ろす。無
論、物理的な動作にはできそうもなかった。

あれから一時間は隆慈による独自の搜索が続いたが、ほぼ成果はない。

『一、三時間も無駄足』と言い残しつつさつき独り帰路についた敵宮の存在は、隆慈の頭から綺麗に排泄されていた。

時刻は未明。どこぞのエリート会社のエリート社員が利用する豪華な社宅の前を横切った辺り、隆慈は冷たい何かを感知する。

それは雪だった。

「またか……………」

上空の闇を仰ぎ、隆慈は澄んだ声で呟く。

直後、周辺にはいないはずの人の声が、抑揚のない女性の声が聴こえた。とても繊細で、それでいて良く響く声。隆慈のそれと相容れぬ何かを秘めていた。

「……………かな?……………ても……………いいよ……………へえ……………いもの好きなんだ……………黒……………ごさん」

声は断続的にも隆慈の耳に届いた。が、意味は捉えられない。

黒子さん?

ふざけた名前だな……………。

誤認にしろ、九十九パーセント隆慈には無関係の会話だ。そろそろ叔母が勤務先から帰宅する頃、独り身のためか異常にスフレを溺愛する叔母にどう訳を話すか、隆慈の頭脳はそのことに是非もなく占拠されていた。

「叔母さん、ヒステリック起こさなきゃいいけど……」

めまぐるしく稼働する頭脳より溢れた言葉を口で排泄する隆慈。

その場で一息吐いたのち、自宅への地図を頭の中で展開しつつ、隆慈は歩行を再開する。刹那、社宅の敷地内と特定できる角度と距離から、意外な単語が発せられた。

「バイバイ……黒猫さん」

隆慈にはそう聴こえた。いや、間違いない！

スフレ……？

単語から彷彿、連想された者の姿を稼働中の頭脳で構築し、隆慈は瞼が開閉する一瞬に準ずる速度で上半身を左に六十度回した。確信への境界条件は事足りる。

声の言う黒猫はスフレだ。

確信を重ねた隆慈は頬を平手アンド平手で軽く叩くことで、冷えき

って鈍化した躰にお灸を据える。全開だったブレザーはボタンで結合。今の隆慈にいつもの逡巡はない。

隆慈が初めの一步を踏み出したとき、虚空を舞う白く冷たい妖精は数を倍増させていた……。

「アカリお姉ちゃん今日ウチ来なかったけど、じいじ何か聞いてんの？」

氷室一縷は運動会の赤組でも象徴していそうなハツピを雑なく畳みながら、やや距離のある玄関にあどけない声で問う。
事務所風の清らかでゆとりのある玄関には、

サンタが居た。

従来のイメージにある『あのだるそうな帽子』の代わりに、頭部には冷え症な人が冬お世話になる『あの防寒アイテム』が装備されている。一縷はその呼称を知らない。

「一縷は“えすぱー”でなかったか？言っというて、もう承知しておるくせに」

地味でしょばい白髭を擦ってから、サンタは俳句を詠むかのような悠長さで言葉を紡いだ。にしろ、言っていることは果てしなく子供っぽい。

間髪入れず一縷は、

「知ってたらきかないよ。じいじさあ、誤解してない？僕、べつにエスパタイプってワケじゃないんだけど……」

病院などに広く遍在する面長な待合椅子の上で脚をうんと伸ばし、一縷は膝に乗せた層を成す正方形のハッピを一对のパーでぽんと叩く。綺麗好きな自分を再認識するかのように。

「“えすぱー”でない？

むう……それは困った。わしのなかでは一縷は『えすぱー少年』で通ってたんだが……」

不満を隠すことなく冷え症のサンタは不服を漏らす。小学生にだ。

天井を上目づかいで見つめながら一縷の脇をかすめるサンタクロースもどき。

一向に停滞する兆しもないまま、

（プリンターやホワイトボードを擦り抜け）前進する祖父の様子に質問の霧散を危惧した一縷は、ずひっと待合椅子から身を乗り出し声を飛ばした。

「アカリお姉ちゃん『メリーメリー』辞めちゃうの！ー」

一縷に心当たりはある。きつと、自分のせいだ。

「ん？辞めんよ。……今日いないのは巡礼のために、お前さんのこととは関係あるまい。ただの墓参り。……父親のな」

サンの背中から返ってきた人格無視の真面目な言葉を咀嚼し、
一縷は唾を飲んだ。

墓　　つまり、死？

それは、
一縷が関知していない項目だった。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（5）（後書き）

独創性って何でしょうね。他意のない自負はありますが、やはり基礎的な文章表現能力が伴っていないと（ちとだけ）難儀です……。年の功による知識や技術の差異を埋めるには勉強不足なんです。いやはや。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（6）（前書き）

文字数が遞増中です。加え、比較的真面目な表現を導入しました。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（6）

【 1 6 】

潔白を誇りであると妄信していそうな社宅の性格は、照明の光りに頼りきった隆慈の目でも観察できた。

きつと、建造物の父親とでも呼ぶべき建築士に教え込まれたのだろう。

母親は確たる業績を残した大工？それとも、建築の基を成す無機物を育んだ誰かさん？

社宅の妄信より質の悪い妄想を見えない図面に展開する隆慈。彼は今、周囲の住宅圏から存在的に孤立したマンションの眼下に居た。辺りに漂泊する夕食の匂いに誘われ、雪の体裁を借りた妖精が音もなく虚空を舞う。

敷地内にアクセスする前に、コンクリートの帳に添えられた公式のタグは確認済みだ。ここが、あの赤茶けた気象予報センターの社員が利用する社宅であることは間違いない。

信憑性は明瞭。

ならば、利用者はせいぜい公務員然としたエリートマンであろう。

個人的にも長いしたい場所ではない。目的はただひとつ、逃亡者の捕縛。

といっても、

たかが猫一匹だが……。

自分の呆れた感性に思わず苦笑し、ついでは対知人用のポーカーフェイスを解除した隆慈は、声のした方向　逃亡者の潜伏先へと主軸の指針を定めた。いわば躰の向きを換えただけ。

いくらか歩いた結果、社宅の側面に位置する駐車場に隆慈は到る。見上げるまでもなく頭上には、天地を隔てる厚い天蓋があるのが判った。車を何から護りたいのかは不明。

「ああ、それでか……」声が響いたのはこのためか。なるほど。

反響効果だ。

隆慈もいつかの学校でそれらの物理現象を習った。いつだったかは思い出せない。きつと、常識に起源はないのだろう。

思考の片鱗を呟いた隆慈の足許に、黒っぽい何かがなすりつく。否、黒ではない。良く見ると焦げ茶……そして微少だが白濁も混じっている。

辺りが暗いせいで迷彩になっているだけだ。

「スフレか……？」

返答に期待できない疑問を口にし、膝を限界まで屈折させた隆慈の目と鼻の先には、猫。黒っぽい何かは猫だった。

人間で言うところの髪を隆慈に撫でられ、言葉どおり猫撫で声を喉から発する三毛猫の正体は、もう隆慈の中では確信に等しい。

スフレだ。

逃亡者・スフレ

容疑 脱獄

十一月十五日、

午後十八時四十九分。

容疑者、確保。

義務に従順な自分の仕事ぶりにほくそ笑む隆慈の傍らで、スフレは嬉々とした黒い瞳を隆慈に向けていた。きつと、成り行き飼い主の愛情度でも試したかったのだろう。

『よくオレっちを捜し出したじゃんか』

とでも言いたそうだ。悪びれた様子はない。

「ご苦労様。……そう言いたいんじゃないかな？
わたしの勝手な想像だけど……」

?!

音声が若干反響して位置は不鮮明だが、おそらく正面から声は放たれた。透き通って弾力のある声色。もちろん反響の作用もあるだろうが、それを差し引いても隆慈の評価は燻し銀だ。
しゃがんだまま例のごとく見上げると、

礼服の女性が居た。

黒一色。

初め、隆慈はそう思った。しかし、その認識が誤りであることを直ぐに気づく。控えめに露出した肌がうつすら白い。まさか病持ちではないだろうが、それは雪のように無垢な美白肌に思えた。

照明が充分でなくとも隆慈には判る。どちらかと言えば視力は良い。気配には鈍感だが……。

「ああ……、見つけてくれた。か」

彼女に関する様々な憶測が飛び交う頭の会議室に注意を逸らしつつ、隆慈は感慨っぽい心情と言葉をでっちあげた。とりあえず、一点に定まらない視線はスフレに預ける。

なぜ自分がこの猫の飼い主であることが判別できたか、といった疑問は今の隆慈には無粋に思えた。

「どうして自分が飼い主だって判ったのか？不思議に思ってるんじゃない。違う？」

歩む人影に反応した天井の照明が連続して点り、

礼服の女性の外観を晒す。

隆慈との距離は七メートルとない。慌てぎみに立ち上がることで対応したつもりだ。

同年代？

礼服の女性は思いのほか若かった。

社宅の利用者であることと、黒い礼服姿で登場したことから、隆慈は少なからずの先入観を抱いていた。

同年代。

否、もしかしたら同い歳かもしれない。

「え？いや、そりゃ……思ったけど」たじろぐ隆慈の声は微妙に上擦っていた。凶星だったからだ。

所在なさげなスフレの視線に応えながら、礼服の女性は言う。

「警戒心ないもの。黒猫さん。わたしのときなんてろくに触らせてくれなかったんだもの。……犬の匂いがしたのかな？」

犬？

そんな匂いはしない。

隆慈は、どういう訳か無性に彼女の言葉を否定したくなったが、それこそ無粋なので断念。

「ああ、それはある。こいつ警戒心強いからな。逃げるの速いくせに」

隆慈は言い、そっぱを向くスフレの尾をつまむ。

隆慈は『フツー』っぱいことを言っただつもりだ。が、前方からくすつと笑いが漏れた。嘲笑の吐息とは考えられない。

隆慈は視界のピントを微調整し、淑やかに手を口許に添え微笑む少女を確認。

雪の妖精でも、黒装束の天使でもなさそうだ。

頭の断面をさじで攪拌かくはんされたような状態の隆慈には、何かを賭けてまで断言できる自信はないが……。

「ふふ……、逃げられちゃったんだ。飼い主なのに。でも、そうは見えないな……。」

ねえ、何で逃げたの？」

『なぜ脱獄を許したのか？』ではなく、『いかなる理由により乖離したのか？』を質す少女。鉄壁の白い笑みは真摯さを宿す。

「話すと長いよ。それでも聞く？」

つか、寒くない？その格好ってさ、礼服？」

疑問のアクセントを濫用する隆慈。スフレとは違い、返答は期待できた。

「聞くよ。尋ねたのはわたしの方だし。それより、お腹……減っていない？あちこち捜し回ったんじゃないの？」

途中、駐車場からの出入りが可能な社宅の第二アクセスポイントへと顔を向け、

「部屋来る？こっちの事情で一人分余っちゃったから、力貸してくれと助かるんだけど。」

犬嫌いなら遠慮した方がいいけど……」

再び顔を隆慈に向け、少女は言葉を切った。

隆慈が知リたかった礼服の理由は、すんなりスルーされたようだ。

「遠慮　とかじゃなくてさ。その……、初対面の人の家？てか家

庭に、土足当然で入り込むのは抵抗あるっていうか」

言いながら流した視線が、スフレのそれと遭う。隆慈の眼にそれは、いたく退屈そうに映った。

おれ、揺らいでるよな？

天井から拡散して射す白い光芒を乱反射するスフレの瞳に、隆慈はアイコンタクトを試みる。特に意味はない。

意して逸らされた隆慈の顔を、なんら抵抗なくまっすぐ見据える少女。

初対面。つまり、名乗り合わなければ必然的に相互の名前を知らないまま。

あたりまえを、隆慈はなんとなく知覚した。

「誰も居ないよ。いま507号室に居るのは、わたしを除いてクラウドだけ」

当然のように言う少女の表情は、不況和音を軽く無視してしまいそうなほど和やかだ。

クラウドディア？

そういえば、犬がどうとかって。

「いや、なおさら抵抗あるし……」

隆慈が返答に迷っていると、あの“ちょい”な中年のように渋めに洒落たエンジン音がこちらに近づいて来た。

ああ

遅れて隆慈は気づく、ここが駐車場であることを。

適当な措置を思いつく間もなく、漆黒に塗装された低い車体の四駆が隆慈の視界に介入してきた。スポーツカーだろうか？

車の顔面に二つ付いた離れぎみの眼を必要以上に煌めかせ、三度、瞬いた。先程のアイコンタクトと比較すれば、かなり本格的かもしれない。

あ、スフレは？

忘れかけていた逃亡者の存在を思い出した隆慈は、数十秒前に録画したばかりの映像を頼りにスフレの立ち位置を視力で探る。

いない！？

「 宥夜？！」

同時だった。

声のせいで、否、声に含まれた男性の名前のせいで、隆慈は優先事項を見失う。消えたスフレに意識を定めつつ、顔は少女へ。形ある物を視る器官は、顔にしか付属していないのだから。

驚いた様子で黒い車体を凝視する少女。やはり、照明あつての印象は少女。

隆慈の視線に気づき、少女は一度だけ頷いてみせた。意味は『待つてて』だろう。

車との距離はある。頷き返すそうか言葉を返そうか決する間もなく、少女はマフラーをこちらに向けたまま停まった車の方へ急ぐ。小走り。四駆の操縦者が男であることは間違いない。ユウヤなんて名前の女はいない。もっとも、隆慈がつい先刻まで言葉を交していた少女の“オトコ”である保証はないが……。

一日に限られた知力を損耗し、隆慈が思い巡らしていると、
「仕事が終わってて当分帰れない……て、電話で言わなかった？」
音量は低い、反響効果は健在だ。距離があっても充分聴こえる。

「いやな、俺もそう思ってたんだけど」
男の声は若い。隆慈には二十代に思えた。

「『俺も』じゃなくて『俺は』でしょ」
間髪いれず少女が言葉を裂く。口調は割と大人しい。

「ああ、そうだ。いいから揚げ足とるな。聞け。
……えっと、あれだ、俺が有名人だからって連中が氣遣ってな。
テレビに映る訳だから、寝てないと顔色に出るって、上司とかも口揃えてよ」

自信に満ち溢れている。とでも言うのだろうか。男の声色から隆慈が想像できる人物像は、どうもデータが融解ぎみで釈然としない。

このまま立ち聞きするのも不躰だ。
場の違和感からそう思った隆慈は、付近の物陰に身を潜めているで

あろうスフレの救済を履行することに。

数メートル先に駐車された四駆を一時は視界から外し、されど興味には勝てず、隆慈は再度目標物の方角へ振り返る。

「あ……………」

車体から乗り出した男と視線が交り、隆慈は彼の名と職種を識別する。男とは面識がある。そんな錯覚さえ思考をよぎった。

白樺宿夜

圧倒的人気を誇る気象予報士。支持者はもっぱら働く女性。OLの叔母も“ゾッコン”だ。少なくとも、隆慈はそう認識していた。

東北地方に転勤だつて叔母さん言つてたっけ？

まさか、新潟こうちに転勤？

そついえば……、新潟こうちの気象予報センターって最新設備？

天候の観測に新旧があるのかは、隆慈には判断つかない。さして気にすることもないが。

白昼の樹海で対面したハブとマンゲースのように、ぎこちなく睨み合う隆慈と宿夜。

沈黙の幕を下ろし凍結する駐車場に、照明の発する繊弱な唸り声の音が垂れ流しで通過する。時間の経過と共に……。

「誰……？」

まさかお前、ここ来てさっそく“オトコ”つくったのか？」

車のドアを慣れた手つきで閉めつつ、宥夜は少女に軽口を刺す。

「ちがうつー！」

隆慈が男の言葉を認識する前に、瞬発的に反応した少女が否定の声を上げた。

！？

あのコ、そんなキャラだったわけ？

思い。驚いているのは自分だけだろうと、気象予報士に目を遣れば、意外にも彼は『ぶったまげた』といった表情を隆慈に向けてきた。どうやら奇跡の共感らしい。

「わたしは宥夜とは 兄さんとは違うのよ。根本的に」

場を繕うように明るいうつ調で宣言した少女は、ふるりと身を翻して隆慈に歩み寄る。

二人の距離は縮まりつつある。無論、物理的な意味でだ。

兄さん？

白樺宥夜が彼女の兄。ってことは、彼女がああ

「そ。宥夜が東京でスキャンダル騒ぎを起こして迷惑かけたアイドルのコの身代わりを務めた白樺宥夜の妹、白樺灯」
早口で言う少女は、ゆったりとした歩調。ついさっきまでの微笑は、いつの間にか笑顔に昇格したようだ。

「白樺灯？」

いや、聞いたことはあるけどさ、別に……。ちょっと、叔母がその手の事情に鋭敏でさ」

いつもの自分らしくない。

隆慈は自覚する。いつもの自分だったら、こんなにも容易く同年代の少女に心を読まれるはずがない。弁解はあくまで奥の手だ。

「たまたま髪型が似てたから……、皆さんが見た写真の娘はわたしです。マンシヨンに同居してる妹です……って、公の場で嘘をついただけ」

言ったのち、弾んだ笑顔のまま立ち止まり後方を振り返る少女灯。

彼女が背にどんな顔をしたのかは、隆慈から見て前方に佇む男宥夜のこわばった表情から想像するしかない。

「あのさ、外……雪降ってるけど、寒くない？
さっきも言ったけど……」

躊躇いがちに言う隆慈は、密かに彼女の臍を案じていた。灯の纏う礼服は、一口に黒のワンピースと言っても通る。

「え……？」

言った隆慈の真意を読もうと、臍ごと反転して向きを換える灯。瞳には何も宿っていない。

つくしゅん！

隆慈は、

彼女のくしゃみで一瞬

時が停まった気がした。

単なる気のせいだが……。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（6）（後書き）

一話目の副題にある『たゆたう水面』とは、主に代わり映えのない日常を暗示する比喻ですね。（みなも）じゃなくて（かわも）でも良かったんですけどね・・・

第一之譚：たゆたう水面と並木道（7）

【 1 7 】

相互関係が跳躍するといった突飛な展開が用意されていた訳でもなく、隆慈は端的な経緯を二人に話したのち、ほんの少しだけ名残惜しい別離を経験した。

再会は絶望的。

のはずだった。

それを覆したのは、別れ際に白樺灯から手渡された、一枚の札。

“札”とは髓に古風な物言いだが、万が一それを紙切れと直訳すれば、前後の状況からメールアドレスと誤認しかねない。駐車場の彼女は、初対面の男に連絡先を渡すようなちやちな真似とは無縁に思えた。筋合いも筋書きもない状況化で彼女がアドレスを託すとは、金輪際、考えられない。

隆慈の認識作法は、一撃必中。即、離脱だ。

「名詞……だよな？」

ヒーターの熱を半身で感知しつつ、隆慈は再認識の言葉を呟いた。隆起した片膝の頂に乗せた右手には、一枚の札。

名詞っぽい。

赤い正方形崩れの札には、粗のない白い活字でこう記述されていた。

有限会社

「メリーメリー」

秘書／白樺 灯

社員尽力の限り、ほほえみの華を咲かせます。

らしい。

裏面には細かな字で、住所と番地、電話番号が添えられていた。そこは、駅から歩いて十分とかならない距離だ。

宗教の勧誘ではなさそうだ。それより、あの歳で肩書きが秘書とは……。格差社会の浸透。恐るべし。

『いつもの』に戻った自分の考察は相変わらず洒落が効いている。軽く自覚しつつ、隆慈は体勢を解きながらブラザーを脱ぐ。名詞はそのときにブラザーの内ポケットに収めておいた。ついでにヒーターに休暇を与える。善意ではない。

「……………風呂」

言い捨て、特筆すべき箇所が見当たらない部屋を後にした隆慈は、一階へのアクセスポイントである緩い階段を下った。

階段の存在から言うまでもなく一軒家であることは判るが、契約者の存在が失せた今なおローンは継続中。つまり、一軒家として完全体ではない。

想い出にかかる霞みのように淡い白で統一された一面の壁は、隆慈の視た限りでは純心を忘れずにいる。叔母の配慮だろうか。いずれこの場所に帰って来ると、叔母が信じている実の姉への……。

煩わしい雑念を熟練の術で払い、隆慈は境界なく広がる一階の居間^{リビング}に意識を移す。

品のない笑い声が聴こえた。叔母なはずがない。

中央のソファーでは、上下スーツ姿の叔母が膝にスフレを束縛しながら、定位置に在る無限の窓口へ顔を向けていた。ただのテレビと言えば、それまでだ。

そういえば、スフレは帰宅済み。どういう訳か自主的に。

自分の苦勞は何だったんだか……。

そんなことを隆慈が思っていると、

「ありがとね。隆慈」

画面上で繰り上げられる寸劇に顔を向けたまま、うんと優しい声色で叔母は感謝を示した。隆慈は意味もなく癢に感じ、

「なんで？」

と聞き返す。

動作は冷蔵庫の開閉。ちょっとした隆慈の癖だ。

「ふふ……どうしてでしょう」

叔母は振り返らずに一言。漏れた鼻息は、画面上の茶番に対してか？あるいは、西洋の魔女がする不適な笑みか？
あいにく、隆慈には判断つかない。

「は？意味解んないし」

呆れた口調で隆慈は会話を締めくくった。主目的は風呂だ。いらぬ感謝ではない。

雪は止んだのかな？

気になった隆慈は、正真正銘の『窓』を横目で窺う。キッチンに備え付けの窓はやたら狭い。

積もらなかったか……。

曖昧な紫に染まった街の風景に、白はない。

雪は止んでいた。

殺人的な木枯らしを引き連れて、朝は新潟の地に訪問した。

山籠もりの仙人が言うほど、朝は清々しいものではない。一編、厚生機関が世論調査でもしてみたらどうだろうか？

栓なき考察は健康の証。いつもの倦怠感に包まれた朝を察知した隆慈は、一晚のうちに気だるさの巢と化した部屋の換気と共に、さりげなく自身の健康を診断した。

結果、不調ではない。好調かもしれない。

「悪くない……か」寒いけど。

眩き、風で飽和したレースっぱい幕を払った勢いに便乗してベッドを離脱。そのまま迷うことなくトイレに直行。一日の序盤、最初の目的地は階段を下りた先にある。

一日は間もなく、

オン・エア

「『それに……暗いから危ない』なぐんで、さらりと付け足すんだからあ。もう、キザかよ！こいつ……てさあ」

笑っちゃうでしょお、と降参のモーション付きで話す畝宮。

机を舎弟か下僕として扱う畝宮を中心に、周囲にはちよつとした集落が形成されていた。否、前言撤回。集落は過言だ。

「あれ、智子どした？」

年頃娘の爆笑が炸裂する朝の教室で、ひととおり戯れ言が披露されたのち、畝宮は違和感から尋ねた。

智子と呼ばれたモデル風の女子は変わらぬ姿勢で 笑う畝宮を真剣そのものの顔で直視して、静かに言った。

「チ力さ、昨日……なんかあった？」

「……………へん」

へん？

変???

不自然に穏やかな風のように猛りが萎えた女子の様子に、近くの机に突っ伏した男子が顔を上げた。あの騒音に晒されながらも寝ていたのかどうかは判らない。

窓際では数人の男子が、校門を経由して校内に進入する生徒群を遠目で検査している。知った顔でも探しているのかもしれない。

「あ！五十嵐じゃね？」

一人が下界を見下ろしたまま言った。

「ああ……五十嵐だな」

「マジ？今日早いじゃん」

「ん、どこ？」

判らない様子の若干二名に渋い顔で一瞥を加え、

「あそこだって。ほら、校門とこ。ビミョーに死角だけどさ」と、解説する発見者。

「……おお、いんじゃない。ココロ容れ替えた……とか？つかよ、朝の待ち合わせじゃね？」

誰かが、そんなことを言った。

待ち合わせ？！

当てのない憶測を信じる自分に気づき、畠宮は鼓動が速くなるのを感じた。周囲にたむろしていた女子は、窓に向かって拡散しつつある。

「ちょっと、行ってくるから」

沈殿した空気の中に一言残し、畠宮はアクションスターしながらに机から疾走の補助をまかった。マックスゲージの勢力を維持して廊下へ躍り出る。

「行くて、どこに？」

「チ、チ力！？」

「待ちなつて」

間際、信頼の置ける数名から声がかかった。説明している暇はない。

ごめん……。

友を無視して突っ走った自分に嫌悪しつつ、畝宮は廊下を駆ける。これってドラマみたい。と、不本意にも笑みが溢れたが、すぐに気持ち切り換えた。

勝負。なのだから。

新潟では並木道が流行っているのだろうか？

代わり映えのない。否、季節に足並みを揃えて装いを替える通学路を歩ながら、隆慈はふと思った。

今、隆慈の眼前に広がる情景は、学園ドラマの撮影にはうってつけと言える。ここにハツラツとした主役でもヒロイン駆けていれば、まさに『言うことなし！』なのだが……。

隆慈の躰が命令に離反して固着する。主役のフレイズで連想された
ヒロイン
昨日の下級生の顔を起因にしてだ。無理もない。

あれは、明らかに自分に気がある。素振りが、ではない。態度が、
でもない。あえて言うなら、

視線が、
であろうか……。

外部から侵食する“想い”を寸のところで一蹴し、隆慈は造作ない
はずの歩行を再開した。足取りは気のせいか重い。隆慈は無視して
歩く。

今は“入”のみに一貫されている校門が見えてきた頃、隆慈は壁に
寄りかかる不良を視界に捉えた。くどいようだが、五十嵐勝御。

振り向き、五十嵐の口は『お』に変じた。

気づかれた。もっとも、気づかれずに校門を通るのは、例え忍者で
も困難かもしれない。

「おう！リユージくん。待ってたぜい。これはこれで感動の再会」

身を起こし挨拶っぽい台詞を述べた五十嵐は、手招きで待ち構える
つもりらしい。周りを気にした様子はない。

不自然に速足へとシフトした周囲一帯を横目で窺いつつ、隆慈も軽
く同調してみる。足並み揃えてを実践するのは、これが初めてでは
なかった。

「おおっと、ちょいちょい。待てば成るって。
リユウちゃん。最近どうもオレに冷たくねエ？」

背中越しにすぐりつく甘えた低い声を聴きながら、淡々と隆慈は速めの歩行を続ける。

まさか、五十嵐とて背中から抱きついたりはしないだろう。そんな認識を隆慈は、微塵も軽率だとは思わなかった。数秒後までは、の話だが……。

???

隆慈の躰に何かが纏わりついてきたことで放たれた奇声、
「んぬああッ?!」
を意識するのは、隆慈自身にも無理であろう。

「んな叫ばんでもよくねえ？」
と、こめかみに吐息がかかる。

背後より癒着する五十嵐勝御から隆慈は全力で離脱し、ふざけんな
っ、と短い怒声を水分を渴望する舌でまくしたてた。

隆慈が警戒“全開”で振り返ると、

「男同士のスキンシップだろーに」

隆慈の警戒を凌駕する“満開”の笑みで肯定。

最大限の呆れ顔で躰の軸を戻し、なにげなく前方へ目を遣ると、

畝宮チカが居た。

一部始終を静観していたようだ。軽蔑を含んだ冷笑を視れば、なんとなく察しはつく。

憎いほど鈍い自分のアンテナに隆慈は苦笑しかけたが、基より気配なんてのは錯覚だ。自分は正常ではないか。と、苦みを押し殺す。

「へえ〜。もしかして……とは思ったけど」

言った畝宮の視線は隆慈から逸れ、背に佇むであろう五十嵐へと向けられた。それを『流し目』と呼ぶのかは判らない。現に視線を流した訳だが、異性の気を引くかどうかは隆慈に知れたことではない。

腰に手の甲を当ててから肩で息を吐いた畝宮に、五十嵐は壊れた配管のように詰まった声で、

「なッ、ちよっ、待て。言うな。じゃ、なくて、違う！……誤解。の前に、何がそうなんだ！？」

不審の目で見つめる隆慈に一瞬、視線を送り、続いて多種多様なポーズを試行錯誤する始末。

動揺。それは、比喻するまでもなく明白だった。

は？

隆慈の不審は五十嵐に過密する。目を細め、観察の水準を高める。

ちらと隆慈の横顔を窺ったあと、畝宮が再び口を開いた。

「言えるワケないでしょ。隆慈も聞いてるし、あたしだって言いたくないから」

「だからよお、チカはオレのこと誤解してるんだって……！じゃなきゃなんだよ、オレがリ्यूジンこと」

五十嵐の声は時鈴^{チャイム}に遮られた。幸運かどうかは、もちろん隆慈には判らない。

旋律を聴いたや否や、畝宮はさつさと踵を返して行ってしまった。普段から、締めるところは締めているらしい。

近くで傍観していた男子生徒の観客が数人、こちらを嘲笑いながら校内へ消えていった。別段、気にすることではない。

「……………」
五十嵐は何も言わない。

この人物が無言とは、珍妙な場面ではないか？

思ったが、隆慈は笑えない。代わりに、

「いつもの場所？時間空いたら行く」

渴いた喉を震わせ、隆慈はそう告げた。対して五十嵐は力なく、

「おう……………」
とだけ。

急いでもしかたがないと悟り、日頃お世話になっている脚に好きなよう歩かせた。教室へ到るまでに、自販機のコーヒーを摂取しなくてはならない。この方が都合だ。

「お陰様で喉がカラツカラだし」

思わず本音が口に出た。距離はあるが、五十嵐に聴こえたかもしれない。が、隆慈の知ったことではない。

淡泊で薄情

それが並木隆慈。

心の中で、そう呟く。これが自分のIDなのだと。他人に優しくな
んかなれない。と。

早々と折り合いをつけた隆慈は立ち止まり、確か小銭があつたはず、
とブレザーを両手で探る。
違和感と共に固い感触。

「札？」

違う、名詞だ。昨夜の。

「『ほほえみの華を咲かせます』……か」
傑作だな。

と、自分で口にしておきながら隆慈は笑った。なぜだろう？

しばらく黙って名詞を見つめ、捨てきれず再びブレザーの内へ収納
し、隆慈は歩き出す。

なぜだろう？

自分は何かに

期待しているのかもしれない。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（7）（後書き）

泣き言ですが、十代の作家が綴れる次元じゃないです。伏線なんか見えないだけで相当ですよ。準ドラマな訳で、登場人物の関係が展開やら進展に従い“すこぶる”変動します。投稿中の連載小説は原作として考慮しているので、完成度はあえて緩めていますが、それでも自信作です。できれば、そつとしておいてくれませんか？あ、ご心配なく、物語は支障なく贈りますから。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（8）

【 1 8 】

不穩。

それは、不鮮明な日常に潜む得体の知れない歪^{バグ}ではないか？

空気の淀んだ校内の一角で、並木隆慈は哲学者さながらに思考の海に潜水していた。

片手には、カフェインを主とした液体の缶。隆慈はカフェイン中毒として危ぶまれている。この議題は、頭の会議室では不問にされているが……。

変だ。何かが……。

たゆたう水面に波紋が連鎖するように綻ぶ、隆慈が完備していた日常衛生システム。

冬の訪れを待ち侘びたかのように降り出した、せつかな雪。

どう考えても無関係ではあるうが、似ているも非なるサンタクロース “ 似非サンタ ” の出現にも畏怖を覚える。もっとも、隆慈が目撃したのは三回のみだが……。

考えても不毛は不毛だ。と心中で割り切り、斜め上の窓から換気の措置を試みようとする手を伸ばしたとき、隆慈の立つ座標から比較的至

近の教室から、喧騒の塊が流出した。男女の比率は五分だ。昼休み。普遍的にはそれで通っている時間帯。なんら不自然ではない。

マジでえ！

うっそ、ホントかよ。

デマでしょ。

聞いてないよう。

にしても、出力が異常ではないか？

半信半疑の台詞を連呼しながら廊下を駆ける不特定多数に、隅で呆然と立ち尽くす隆慈は決断を迫られる。

他の教室は？

と順当な判断をし窓を見やれば、やはり、観察できる事象はどの教室も類似しているようだった。

行くか。

頭の会議室が“追求”を可決した。手元に残留する首魁を示す名を冠した缶コーヒーをぐいと飲み干した隆慈は、再度この座標に戻って来ることを首魁 “ボス” に誓い、一角に沿う形で付加された椅子に缶を置く。

独自の歩調で喧騒の塊を追跡する隆慈も含め、今、この瞬間に、灰褐色の空から世界の何よりも儚い無機物が舞い降りていることには、誰一人として気づいていないだろう。

今朝の天気予報は、降雪予報でも積雪予報でもなかったのだから……。

精確な性格の時計が顯示するのは、十二時二十八分。気象予報センサーに雇われた時計だ。ニアミスはありえない。

白樺宿夜は、放送を主旨に特別設計された部所に居た。珍しいことではない。宿夜はキャスターとして雇われたのだから。そして今日が、新潟市民へのサプライズ・デーになるはずだった。雪さえ、降らなければ……。

「なんだかなあ。衛星が狂ってるとしか言いようがない」
喋ったのは同僚の滝岡。酒豪な無精髭のメカニックマン。しけた情報だが、宿夜は彼に興味がないのでそれ以上知る必要がない。
本番前にADらしき女性から直されたネクタイを緩めた宿夜は、脇に隣接した滝岡の肩を軽く叩いて前進する。放置された“回転する椅子”を避けて進むのは、熟練でなくとも可能だ。

「どうです？」

床を這う機材の動脈を二、三つ跨いだところで、宿夜は話を切り出した。意図して近づいた隣には、有能でお喋りな同僚の代わりに姐御肌の美人。首から垂れる二本の紐の先にあるカードは赤い枠で、

それがディレクターの証。

「空回り。部所の編成、考え直さなきゃね。

……明後日あたり。」

考えではなく腕を組み直しながら呟いた彼女は、現場に三人居るディレクターの一人であり、この階を占める気象放送部の部長だ。発信を兼ねた気象予報センター。それが異例かどうかは、博学に精通する者にでも聞いてみるしかない。

「そうじゃなくて、天候。こっからじゃ空は見えませんかね」
はぶらかす部長に、宥夜はキレぎみに補う。

「さあ、私も同感だし。お天気キャスターにでも訊いたら？あ、貴方がそうだったわね。失礼」

一瞥のあと、返ってきたのがこれ。宥夜とて、嫌われているのは承知だ。演技っぽく鼻息で苦笑し、

「冗談がお好きですね。外、降ってるんですよ。雪。連中が慌てるのを見れば大体は」

「少しね、北風に混じって。それより、まだ伝えてなかったっけ？
貴方、帰っていいから。」

昼の分は終わり」

「……………はいはい。明日は朝早い、でしょ」

「そ。じゃね」

戯けた顔で手を振り、スタッフの集団へ交わりに赴く部長の後ろ姿を見つめながら、宥夜は思う。

今年は、空も女も読めない年に違いない。と。

「撮影？」

情報通の倉澤が言うにはそうらしい。言葉の持つ意を把促し損ねた隆慈は、思わず聞き返してしまった。

「臨時だからね。正直、僕も驚いたよ」

校門付近にたかる生徒群から一歩引いたところで、倉澤は続ける。

「これは憶測だけど、客観的な観察ではドラマの撮影であることが窺えるね」

「どうして判る？」

冷えた手を腰の辺りの袋で保温する隆慈は、前を向いたまま質す。

それに対し倉澤は指で一の記号に組み、

「簡単さ。まず、ここは公共の施設だ。近辺で撮影する場合でも当然、許可が要る。なんたって、学の舎だからね。例え事前に通知があったとしても、それなら僕の耳に届かないはずがないしね……」。

以上の事から、撮影自体が終始一貫構成の基にあるバラエティ番組とは考えにくい。それに、映画ならエキストラ　つまり『その他大勢』の協力は不可避だ」

「今から交渉、じゃなくて？」

横目で口を挟む隆慈に、倉澤は肩を上下し、

「ほら、見てみなよ」

顎で視線を誘導した。しかたなく隆慈は従う。

「監督か？」

生徒群の隙間から、馴染みの監督ファッションが見えた。

「そう、監督。直談判が今日だとしたら、監督は居るはずがない。撮影の許可が下りなかった、なんてケースも想定できるからね。叩いてない石橋があるんだ。監督は出陣しないさ」

「なるほど……」

隆慈は呟く。でっちあげた心情ではなく、正統な感心だった。

解説は終わり。隆慈はしばらく名探偵の推理に浸っていたが、突如、背後から獣の咆哮に似た大声が放出され、隆慈の耳は一撃でつんざく。

「輩ああつ、ぬあああにやっとなじゃ。ワシらに許可なく撮影とは無作法ならん！」

二度目は聴き録れた。声の主は教員の諸橋だ。

確か、五十嵐の親戚だか親類だか……。

隆慈は傍らの倉澤と視線を合わせ、瞼を刹那の速さで開閉したのち、後方の諸橋へ

「諸橋先生?!」

言ったのは近く的女子生徒。名前は知らない。

「どけ! 並木、倉澤」

のあと、

「……………」

両手はズボンに差し込んだまま、無言で隆慈は左に。

「はい。ごもつともです先生」

と、倉澤は右に。

ふん。と鼻息を漏らし、教員諸橋五十歳は大股で二人の狭間に行く。
ワイシャツ一枚で寒くないのか?

その点は隆慈には不明。

「……さっきの、正解みたいだな」

咆哮の効力で本来の役割を取り戻した校門を眺めながら、隆慈。

「テレビドラマを臨時で撮影。その理由、解ったよ」

「え……?」

名探偵の抽象的な言葉に、隆慈は満点のリアクションで応えた。倉

澤は、遙か彼方の空を仰ぎ見る姿勢で、

「騒ぎで気づくのが遅れたけど、雪だね。これ」

視線に釣られて隆慈も頭をもたげると、白。

雪……か。

火山灰の方がまだ神秘的かもしれない。雪など空気を冷やすだけ。いや、空気が冷えたから妖精が生誕するの？

どちらでもいい……。

午後の授業を催促する鐘っぽい人工音が校舎に響く頃、全校生徒は体育館に収束された。が、例外は少数ではない。集まったのは全体の六割程度だろうか。

教員一同による極めて局地的な報道の内容は、案の定、学区内でドラマの撮影を行うが干渉は皆無　といったものだった。それに対し、館内の各所で抗議じみた声が殺到したが、隆慈の耳には撮影に交われない不服に聞こえたので、教員が一斉に無視したあたり、大して問題はないはずだ。

教育委員会の出る幕ではない。

どちらにしろ、おれには無関係だ。

学校関連は一定のインターバルで無関係。まして、ドラマの撮影など鑑みるまでもなく無関係のはず。
隆慈は初め、そう思っていた。

雲隠れしていたはずの並木家大黒柱（元）と、顔を会わすまでは……。

「スフレちゃん”見つかったから、めでたし！なワケだから、今日どっか行かない？」

放課後。朝の件で五十嵐を問い質すべく席を立った隆慈に、畠宮チカは誘いを投げた。スフレがらみは今日で七回目だ。畠宮とのキャッチボールは、隆慈には負担に等しい。

『報告しなければ良かった』と反省しつつ、
「五十嵐と行けば」

いつもの正論攻撃。畠宮の顔は見ない。

「あ、そうそう。五十嵐^{あいつ}とは別れたから。もち、振ったのはあたしから」

対する畝宮は、さりげなく破局を報告した。教室にはまだ半分は居る。誰も気に留めない。

変わらぬ表情で隆慈を直視する畝宮に、とりあえず感想を返す。

「納得」

「そんだけ？」

「ああ、そんだけ」

口では畝宮の相手をしつつも、隆慈は必死で探していた。名詞を。

「何？サイフ落としたとか？」

言ったあと、畝宮は椅子代わりをしていた“五十嵐の机”から離脱する。些事であるはずなのに、なぜか隆慈には、それが意味深に思えた。

「名詞。……じゃなくて、鍵。家の鍵」

先程の教訓を思い出し訂正。否、嘘。

嘘の副作用で発作的に畝宮の顔を窺ったが、観測不能な至近距離にそれはあったため、またも『発作的に』身を引く。

「な?!……近い」

「そう?これってフツーだから」

背の下部で手を組んだまま言う畝宮。おそらく、女同士の距離感のことを言っているのだろう。

「ああ、そうかもな」

「そつ」

……そうらしい。

話の流れが嫌な方向へ傾いていることに隆慈は気づき、秒単位で性急な選択を済ませ、畝宮から逃避することにした。
わざと遠回りのルートを選ぶも、W杯の先駆者から学んだかのよう
なマークを畝宮は披露する。どこで学んだのやら……。

「……………」

沈黙の源は畝宮だ。隆慈ではない。

いつになく覇気の宿った瞳を昏い隆慈の瞳に反映させ、美装なき声
色で言葉を紡ぐ。

「どうしたいの？」

探して欲しいのか？それとも、撮影を観に行きたいのか？」

「は？」つか、意味解んないし。

結局、隆慈は五十嵐との面会をすっぱかして、ついでに紛失物に関する策動も白紙に戻し、畝宮と撮影の見学へ行くことになった。見学。と言っても、学習要素は微妙かもしれない。
通学路として親しまれている並木道で、撮影は行われていた。

「人とかヤバくない？めっさ多いんだけど」

畠宮の言ったとおり、野次馬は、地上に散乱する枯れ葉のように不特定多数発生していた。発生の境界条件は『ドラマの撮影』、だけではなかったようだ。その証拠に、ドラマに興味が萎えてそんな中年男性もちらほら分布している。

「新人アイドルのくせに生意気じゃない？主演でドラマなんて、十年早いんだから」

「新人だから、だろ」

栓も蓋もない会話を隆慈はする気はない。適当にあしらっていると

バンツ！！！！

轟音が虚空に“こだま”した。

音は正面。緋色の紐を境に、警備員が配置されている。似ているも警察官ではない。野次馬の暴挙に対抗して発砲したとは、考えられない。銃は所持していないはず。

え、何？

銃？嘘だろ……。

事件！？

バカ、シーンだって。

隆慈の周囲で一時は混乱が波打つも、程なく渦の前列から正確な情報が伝達され、乱れた野次馬なりの秩序は鎮まる。

「新人のくせにシリアスシーン？！ますます生意気だからっ」

隣で毒を吐く畠宮に隆慈は一瞥を加えたのち、

「確かめる」

と言い捨て、秩序に空いた穴を器用に擦り抜け前進する。後方から畠宮が制止の声を飛ばしたが、隆慈は耳の鼓膜で遮断した。

温かいな。いや、熱いぐらいだ。

人間の団塊が高めあう体温は、隆慈には不快に感じられた。頭には、忘れていた雪の成り損ないがやんわり無散する。既に溶けていたらしく、感触は蚊の針にさえ劣る。

途中、四、五回は迷惑そうな顔を向けられたが、無事、つまり怪我もなく隆慈は野次馬の前線へ到達した。

「騒がないで！雑音が音声に混じる」

男の声は、丸めた脚本で拡張されていた。籠っではいたものの、俳優さながらの発声法だ。非常に聴き録り易い。が、隆慈は微少な、かつ個人的な違和感を察した。

どうした？

おれ。

体が震えていた。否、何かを意識に伝えようとしていた。

連なるように、背から鈍い衝撃が走る。

「なッ？！」

すぐに知覚する。野次馬の一人に押された。足を踏んでいたのかも

しれない。隆慈は声の違和感を優先し、あげくに無礼を失念していた。

ふざけんな

体重の乗った紐に追従して鳴る金属音。鉄柱もどきの楔が二本は倒れた。警備員は隆慈を支えてくれなかったらしい。

注目と刮目を一手に引き受けた隆慈に、情けはないようだ。近くの警備員は『そこまでして目立ちたいのか少年』と、怪訝な眼差しで隆慈を刺す。終始無言なのが反って痛い。

舌打ちが聴こえた。隆慈に圧力を加えた張本人であろう。確認は無理っぽい。隆慈は諦め、

「こけちゃった」

との台詞で妥協した。頭でも掻いてみる。

「隆慈？」

聴き覚えのある声で名前を呼ばれた。

背に広がるサークルは撮影に占有されている。にもかかわらず、声はそこから放たれた。状況からして、隆慈には『振り返る』しか選択肢は残されてはいない。

しかたなく

！？？

「ああ、やっぱりお前か隆慈。忙しくてな、新潟こうちで撮影するって連絡しなかったし、びびったろ？」

公然に話すオッサン。否、監督らしき中年男。

この環境で言うか？

その前に

「何やってんの？」

疑問は、自然に口から出た。もう、大方の想像はついているのだが、隆慈は回答を待った。

「ん。現場監督。なりで判るだろ。そのための監督コーディネーターだ。偉いんだぞ、ここでは」

独善的に主張する中年男　並木仁朗なみきじんろうは、戸籍上と前置きせずとも隆慈の父親だ。体裁は維持しているが、色々と不透明なことは確かだった。

背丈、及び輪郭は、平均より凛々しいかもしれない。が、それだけだ。爪を隠すほどの能はない。隆慈の知る限り無能の中年男のはずだ。

信じれない。

現場監督とは。

「……あつそ」

「逃がさん」

辛辣な相槌を残し、立ち去ろうとした隆慈を、並木は制す。ブレザーの裾を引っ張られた。

げ。と心中で悪態を吐き、隆慈は最小限のモーションで後方を窺うも、視界に映った未知の存在感に、隆慈は停止する。

さくらいみす
櫻井水涼。本名だっけ。

椅子に腰かけこちらを傍観しながら、紙パックの苺牛乳をストローですすっている。肩には同色のコート。傍らではマネージャーとおぼしき若い女性が手帳を尋常じゃない速度で捲っている。

関心が逸れた。悔い改め、隆慈は実の父と対峙するべく軸を左に四十度廻した。

「おれさ、今、すこぶる不機嫌なんだよね。

話ならあとにしてもらえる」

隆慈は真摯に言ったつもりだ。しかし、父、並木仁朗は笑いながら提案する。

「お前、撮影に加わったりするか？

脚本はまだ出来てないしな。ちったあ脚色ほんしないと味も出ないだろ」

「加わらない」

即答する隆慈。

「まあ、そう言っなよ。な、これだよ。これ」

言う並木の左手は『ギヤラ』を暗示していた。
要するに、

金だと。

「……………」

数秒だけ、隆慈は黙ってみる。答えは、

「やだ」

ノーだ。

一言に、並木の若々しい顔は惨めに歪み、隠蔽していた皺を刻む。

「そうか……、うん。それも一つの選択肢だ」意味不明な言動は空元氣かもしれない。隆慈の知ったことではないが。

金、金、金、金、いつも親父は金ばっかだ。

久しぶりの再会に歓喜する訳でもなく、父子おやこは並木道で遠ざかる。
茶番の観客は不特定多数。

虚空では

風と雪。

儚い宿命を背負った男女同士が、とても、とても短いワルツを踊っていた。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（8）（後書き）

第一話はTVドラマの一回に相応します。図らずも、です。なので連載小説の体裁だと、軽く余所見できる具合に物語が緩んじやいます。本作に何かを見出した方、どうか悪しからず。さて、ようやく並木隆慈の日常も彩られてきましたね。本筋への合併は第二話以降と考えてますが、全体を成す構図は第一話のうちに鮮明にしたいので、外部からの観察では焦燥も募ることでしょう。ですが、どうか悪しからず。悪気はないです。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（9）（前書き）

次回から、章（話数）が一つ繰り上がります。九が初回の帰着点なんです。とりあえず。

第一之譚：たゆたう水面と並木道（9）

【 1 9 】

あれから、校内全土に渡り探索の手を伸ばしたが、依然として隆慈の努力は徘徊や彷徨と呼ばれる杵から抜け出せそうもなかった。幸いにも、消息不明の五十嵐や未だ撮影見学中の畝宮と遭遇することとはなかったが、往復の近道のため教員室を横切ったとき、国語の諸橋と鉢合わせた。

「並木、まだ居るのか。……なにゆえ？」

古典文書らしき傷んだ紙の束を脇に抱え、諸橋はいたって真面目な顔で質疑を尋ねた。ジョーク、とは考えにくい。

安全圏の距離を保つ隆慈は、愛想笑いも程々にひんやりと答える。

「いえ、どこかに鍵を落としたから、ただ探しているだけです」

嘘だ。探しているのは鍵などではない。

「うむ……………」

粹なジョークでも考案しているのだろうか。空いた右手で顎を支えながら、烏龍茶カラーの額に皺を寄せている。

失礼します。との形式に圧縮した声を喉から絞り出した隆慈は、愛想笑い同様、会釈も程々に諸橋を視界から外す。廊下には、足音が一對。

「並木」

と呼び止められ、隆慈は諦観しつつ振り返ると、諸橋は五十歳らし
かぬ艶のある弾んだ声で、

「何処いずこともなく、探し物は西に在る。そういうものだ」

！？

諸橋がミスター手品師のように、隆慈の探している“赤い札”を出
現させた。否、隆慈が背を行く隙に衣服の収納口から取り出した。

「なんで……？」

口を片端に吊り上げ、隆慈が不思議を認める。無論、自覚すらなさ
そうな手品に対してではなく、名詞を所持している訳に、だ。

普段にも増して輝いている諸橋は、隆慈を意図して焦らすかのよう
に瞼を伏せ、

「拾った」

とだけ。焦らす意図はなかったらしい。

「どこで……？」

『なんで……？』と同じ声のトーンで繰り返す隆慈に、名詞を見せ
びらかすように諸橋は、

「常備コーヒーが充実している自販機だ。頻繁に利用するだろ？そ
れで、お前が落としたのだと、今、気づいた」

“ボス”のところか。忘れていた。たぶん、昼間の騒ぎで。

「諸橋先生。ありがとうございます」

隆慈は、歩み寄りながら淡々と言う。名詞との再会による感無量ではない。とりあえずの礼だ。断じて、名詞に執着しているつもりはない。自分は何ごとにも無頓着なのだ。そう、自己分析をしながら、歩む。

「『学校を辞める……』なんて、言うなよ」

名詞を手渡すとき、諸橋は先生っぽい台詞を口にした。刹那、教員室のドアが擦れる音と共にスライドし、

「諸橋先生。電話です。用件は、じかに」

と、女性職員が顔を覗かせる。教員室の名目なのに職員も居る。無理せずとも、職員室の方が適当かもしれない。

「誰だ。津村か？」

「だから。用件は、じかに」

隆慈には見慣れない職員との寸劇に、久々の真なる笑みが溢れる。滑らかに踵を返した隆慈は、足早にこの場を立ち去ろうとしたが、背の諸橋は最後に、

「並木。人生相談は怪しい宗教団体に、ではなく、先生に、だ。

……それと、担任にこだわるな」

例のごとく教員室のドアから顔を覗かせ、そう締めくくった。遅れて隆慈が振り返った頃には、ドアはいつもの変哲なきドア。

宗教……か。

人気の失せた廊下で、隆慈は名詞に記述された文字を記憶にリロードする。もう、紛失しても困らないように、と。

有限会社。株式が主流の時世で、有限。大人の援助なしで会社を経営しよう。といったキャンペーンかもしれない。それならば、彼女白樺灯が便宜上“秘書”の肩書きでも、納得できる。

うん。頷ける。

論理的、かつ合理的な解釈を吟味しつつ、隆慈は歩行を再開した。腰のポケットに冷えた手を収め、なんとなく窓に目を遣ると

降雪は継続していた。

立冬を跨ぎ十一月中旬に入ってから、列島の北東は頼とみに冷え込みつつある。

秋の末期。凍てつく木枯らしに連れ添うように、あたかも婚姻を経た配偶者のように、雪は新潟の地に来訪した。

「寒いんですけどお。風は冷たいし、雪とか降って、ありえない」

喉元で可愛く加工された細い声で、来客した“こごえる夫婦”をそしめるのは、櫻井水涼。^{さくらいみずすず}しかし、夫婦は非難されるのには慣れている。小娘に構う様子はない。

「我慢しなさい。寒いのは皆も同じ」

代わりに弁護したのは、水涼の専属マネージャー新田。^{にった}口うるさい眼鏡姐。それが水涼の評価だった。証拠に、言葉は帰趨なく連続していた。

幼稚でわがままだと、指摘し。大人の分別。自分の流儀。あげくにアイドルの甲斐性について語り始めた。雪にも劣らぬ白いベントに肩を預ける水涼は、口を尖らせ弱々しく、

「はい」

でやりくるめる。

「そう。良い子ね」

母親が娘にするように、水涼の頭にやんわり手を乗せ、新田は言った。『新田は言った』は、駄洒落ではない。

周辺には出演者のために設けられたテントの他、スタッフが移動に用いる黒いベント数台、撮影に関連した機材、人材の姿があった。比較的屈強な警備員が守衛するバリケードの外には、まだらではあるが撮影当初から居座る者の影も。

誰？

……怖い。

携帯の極小レンズを向ける者はまだ許せる。自由だ。けど、何時間も苦渋を浮かべずに居座るのはやめてほしい。ストーリーカーにトラウマのある水涼には、熱狂的なファンは畏怖の対象に他ならない。

あのときは、白樺宥夜が助けてくれた。

偶然、

だけど……。

感情に溺れかけ、水涼は稀釈した意識を呼び醒ます。

「新田……？」

新田がいない。名前をリピート再生しつつ、辺りを洞察。目、首、半身、と徐々に複数化する部位を駆使して、新田の姿を捜す。

居た。

こちらに背を向けた姿勢で、監督に掛け合っている。水涼の認識では、監督は格好良いけど絡みづらいタイプだ。加えて、相手はあの新田。フィーリングからして、談笑ではなさそうだ。

しばらく水涼が観察していると、新田が大人しく頷いたのを機に、監督が近くの演出家を粗野に手招いた。演出家が手にしているのは厚みのない脚本。薄くとも、キャストやスタッフにとっては撮影の礎だ。^{いしすえ}見くびってはならない。

垂れ流しの閑暇にあくびを添えた水涼は、退屈凌ぎのため肩のコートから携帯を取り出す。
着信履歴は、

一件。

……メールだ。

水涼は迷わずメールを展開する。友人への返信は早い方が良いに決まっている。

題＞水涼もこつち？

本文＞アカリだよ。

着いた？撮影中だったらゴメンね。

外は降ってるでしょ。せつかちな雪だよね。水涼は冷え症なんだし
気をつけてよ。あと、新田さんに文句ばっか言ってる？あんまり
困らせちゃダメだよ。

わたしも抱えてる仕事を処理したら行くね。明日には片づくかな？

お母さんみたい。

飾りが剥がれ落ちるように緩んだ表情で、水涼は笑った。

灯とは“あれ以来”友達契約の仲だ。例え時間や空間の脈絡がなくとも、こうやって些細な信号を送ることで互いの存在を確認し合っ

ている。

灯は面白い。

『変わっている』と言えば、灯は容認するかもしれない。

『お人好し』と言えば、灯は否定するかもしれない。

本当に、灯は面白い。

友人のことを想っているうちに、水涼は返信のメールを書き終えた。

送信。！？

突然、監督らと話し込んでいるはずの新田から名前を呼ばれた。

水涼は携帯を畳んで数秒間、指名の理由を想像する。

大方、脚本の味付けか演技の指南だろう。

水涼は肩のコートを脱ぎ、畳んだ携帯と共に手近のパイプ椅子に置いたのち、新人らしく急いでマネージャーのそばに駆け寄り、演技つぼく、かつ可愛らしく息をつく。

「なんですか？」

「キス。共演の子と。できるわね？」

「キス……？」

質問に質問が返ってきたせいで、水涼は言葉を認識するのに数秒かった。

新田がさつき監督にした『肯定の意』は快諾か。マネージャーに幻

滅。

首を横に振りながら水涼は発言する。

「できない！……できません」

「どうしても？」

新田は冷めた表情で眼鏡を光らす。口調は相反して、穏やかだ。

「うん。いえ……、はい！」

「……そう」

新田は言ったあとと視界から水涼を外し、脇のスタッフらと話を始める。

母親に無視された子供のような不安にかられた水涼は、マネージャ
ー新田の腕に触れ、

「ねえ新田、しなくていいの？いいよね？」甘えた声色で囁く。

新田は一度だけ振り返り、

「貴女はアイドルであって女優じゃない。無理する必要はないの」

「じゃあいいんだ。キスしなくて。良かった」

手の平を胸の前で重ね、嬉しそうに言う水涼を尻目に、新田はスタッフらと剣呑な話題を口にしていた。

代わりは事務所にいくらでもいる。

そのようなことを……。

監督は？

並木は現場監督だ。交渉するなら彼。
思いついた水涼は、きよろきよろと小動物さながらに周囲を洞察し
たが、監督の姿は見えない。

上の偉い人とかに電話かな……？

だとしたらマズイ。事務所にでも電話されたら、自分には為す術が
ないではないか。すみやかに監督との交渉を図らなければ
そう危惧した水涼は、迅速に脚を働かせる。

明るい。

立ち止まり、見上げると、郡雲の綻びから陽光がこぼれていた。

並木道は、凍てつく白い妖精の侵略から救われた。

……らしい。

場所は、自宅と学校に挟まれた地点に位置する最寄りのスーパー。崩し着の制服姿のまま、隆慈は夕飯の食材を選抜していた。

唯一の同居人である叔母は、基本的に雑食だ。料理はお手上げなうえ、ほっといたら期限切れのプリンですら、平気な顔して口にする始末。

消化不良。

ともあれば、必然的に負担は隆慈にのしかかってくる。入院でもされたら、並木家は万事休すだ。自己破産は免れないだろう。

会社の倒産。そして、非道な社長の連帯保証人を担いだ平社員。これが、並木家崩壊の顛末だ。

当事者の並木仁朗は言う。罪を憎んで、人を憎まず。と。幼少の砌、みぎり隆慈は何度聞かされたことやら……。

そんな事情からか、隆慈はこの太っ腹な全国チェーン店に大変お世話になっている。

今、隆慈は馴染みの居心地を満喫していた。何より、空調が利いていて店内がぬくい。夏は夏で、冷房の役割を果たしてお出迎え。

大盤振る舞いにも加減があるのではないか。

いかに需要があるとはいえ、時々、隆慈は憚る。

今が、そうだ。

「……電話？」

いつだって電話は唐突だ。『携帯』の通称が、本体と共に普及されてだいぶ経つ昨今でも、それは変わらない……。

それこそ加減のない考察を理性で放棄し、隆慈はブレザーの内側から携帯を摘出した。買い物カゴは放棄ではなく、放置。

「手短に」

不機嫌に言う隆慈。相手は判っている。

親父だ。

「早々それか？お前は相変わらずだなあ……」

「私有地に居る。だから、手短に」

怒っている訳ではない。買い物を満喫していたのを妨害され、不愉快なだけだ。自分は女々しいかもしれない。隆慈は少し自覚した。

「私有地ねえ……。まっいいさ、詮索はしない」

脳天気な口調。相変わらずなのはどっちだ！

「余談だね。原点。次で切る」

「切る？ほうほう、お主、何を斬る？」

「……………じゃ」

隆慈は無表情でボタンに手をあてる。と言っても、あちらからは見えやしない。

「おっと、ここで切ったら後悔するぞ。家に怖いヤクザが押しかけるかもしれない」

声の調子からして、脅迫ではなさそうだ。隆慈は観念して、再び携

帯を耳にあてる。

「まじ？」

隆慈は言いながら、周囲に他の客がいなかどうか確認作業。肥えた中年女性がコーナーに沿って近づいて来た。とりあえず買い物カゴを置き去りにして、お菓子の樂園まで退避。

「つまりだ。お前にはそこで働いてもらう」

「何？聞いてなかった。もう一編」

意味が解らない。隆慈は個人情報再放送を促す。

「ん。聞いてなかった？」

……聞け。そうだな、要約するところだ。父さんな、過去にある会社の株を不正に売買してな。ま、そのときは儲かったんだが、数カ月後にその会社の社員が不慮の事故起こしてな、遺族に訴訟されちゃったんだ。で、負けちゃったんだな、それが。

父さんそんなときは

「

「心境はいい。話が飛躍する」

隆慈は遮ったのではない。導いたのだ。

「うん。まあ、そうだな」

電話越しに頷いてでもいるのだろう。しばらく間があったあとで、
「……裁判に負け、それから株価は下落。いや、没落だな。当然と言えば当然だが、まあ、かくして会社は倒産。新感覚の運送ビジネスもすっかり干上がっちゃった。そんでもって、裏の顧客を介してすっかり筆頭株主な父さんに“ツケ”が回ってきた訳だ。

ただ、倒産したその社長さんが笑っちゃうくらい善人でな、肩代

わりしてもらったんだ。株で作った借金をな」

肩代わり？

隆慈にも、ようやく話が把握できた。

以前『肩代わり』で身を滅ぼした人間が、今度はその『肩代わり』で身を繕った。そういう話だ。

「で、何？その親父の恩人が何？蒸発でもしたとか？それとも自殺？」

「うん。論理的な推察だが、甘いな」

「いいから。手短に」

ウザい。隆慈は、単純にそう思った。

「……お前、本当に聞いてなかったんだな。言つたろ。株の件で関わっちまった連中が、社長さんを捜しだしちまってるな、それで社長さんピンチなんだ。今は新潟こうちでほとんど趣味の会社を経営してるんだがな、そこも危ないんだ。もちろん経営が、だ」

「で、そこで働けと？」

茶々を入れてみる。

しかし

「そうだ」

冗談ではないらしい。真面目な声が返ってきた。

「は？」

情けなくと口を開く隆慈に、父、並木仁朗は部下に命令するように、
「趣味で経営する会社で働いてもらう。人手が不足しているそうだし、
そう言った。」

な……、シャレンなってねえし。

携帯をだらりと耳から放した隆慈は、選り取り見取りに陳列するお菓子
菓子の棚に、背を

箱が墜ちた。否、棚から落ちた。数個ほど。

音に驚いた隆慈は視線も虚ろに落とし、普段のナマケモノのように
焦れつつ腕を伸ばす。

「大丈夫ですか？」

と、建前の言葉をかけられ頭をもたげると、そこには見覚えのある
顔。

「あ……」 駐車場の？

喉元に出かかった言葉を呑み込み、隆慈は屈んだ姿勢を律する。
眼前の少女とは、一度だけ面識があった。否、昨日会ったばかりだ。
そのときは礼服姿であったため、今の彼女とはだいぶ印象が違った
ような気がする。

黒から白へ。

今の彼女は、頑張り屋さんの漂白剤に脱色されたかのようなワンピースの上から、膝まで届く同色のトレンチコートを纏っていた。

「会社の名は」

隆慈の垂れた手には、携帯が握られている。

声は、

そこから漏れた。

『メリーメリー』

第一之譚：たゆたう水面と並木道（9）（後書き）

初回の完結を契機に、脱字だらけで不規則な文（主に1～5）を改竄しました。ある種の法則に基づいてるはずです。是非、見落としがちな粗を燻ってください。賞金はでませんので、悪しからず。

第二之譚：滑稽なる茶番と裸一貫（1）

【2 1】

「電話……いいの？」

微かに音声の漏れた方をちらと確かめ、白樺灯は言った。
静かに、淑やかに、買い物カゴを床に置く。

「聴こえた？」

無粋だ。隆慈は口にしたあと、そう思った。

案の定、灯は『なんでそんな質問をするのか？』といった顔で隆慈を見据えている。

隆慈の速まる心悸とは裏腹なテンポで、首……否、髪を横に振り
「……いいえ」

と灯は誠実に答えた。

良かった……。

素直な言葉を自我に囁き、鼓動を抑える隆慈。

別に聞かれたところで、誘因など生じないはずだ。なぜ、こうまで
隆慈の心拍数を高めるのか？

あまつさえ、会話の途切れなど気にしない性分の隆慈を、この“時
”ばかりは妙に狂わす。

世界の七不思議に匹敵するかもしれない。

考えながら、隆慈はさりげなく携帯の通話を切る。

「買い物？」

灯は普通に尋ねた。

隆慈は引き継ぐように、

「中^{ちゅう}。カゴはあっちだけど」

お菓子の箱を棚に戻しながら、隆慈は放置していた買い物の助っ人を指差す。ここからでは死角になっているので、証言の立証には回収が伴う。

「意外。って言ったら、失礼かな？」

声に反応し、隆慈は視線を返す。

昨夜の微笑がそこにあった。

秘書。

微笑の似合う職種を連想した。眼前の彼女も、隆慈が記憶している名詞の情報を頼るなら、便宜上は秘書らしい。彼女なりの『営業スマイル』かもしれない。

「いや、全然。よく言われるし」

「イイと思うよ。まさか、料理とかもする？」

「日常」

「またまた意外」

「それも、よく言われる」

「言われ放題じゃない。ふふ……、可笑しい」

会話は連続した。

勉強か読書の最中にコーヒーを喉に通すくらいの頻度でしか話さない隆慈にしては、すこぶる希なケースだ。隆慈は一徹に、常套手段を頼ったりはしない。

しばらく灯は目を細めて上品に笑っていたが、隆慈の肩に視線が流れたのを機に、まるで潮が引いたかのように笑みを殺し、
「あ……、もう四時」
呟いた。

閉幕か……。

隆慈は悟った。談話はこれで終わりだと。

「依頼人と約束があるの。なんか、歳が近いのに偉そうでゴメンね。
『仕事が忙しくて』みたいな感じで……」

床のカゴを腕に提げ、灯は謝る。

つか、何歳？

「君さ、おれを十五か十六だと思ってない。十七なんだけど……。もうちょいで」

疑問詞は省いて、隆慈は個人情報に補足する。否、補足ではない。そもそも、名前すら名乗ってはいないのだ。

「ううん」

再び髪を横に振り、

「わたしが十九なの」

灯は、さらりと歳を明かした。

「十九歳？」

驚いては不躰だ。

自覚しつつも、表情を微妙に変化させて、隆慈は本音をこぼす、
「同じ歳。かと思ってた……」

ほほえみ、灯はすぐに弾んだ声色で応える。

「歳より若く見えるのは、お互い様」

「な……」

対する隆慈は、淀んだ声色だ。
人の心裏は目元に表れやすい。隆慈は、意識して顔に力を過密させる。

「……じゃあ、行くね。」

短い沈黙のあと、灯が別れを仄めかした。

！！

咄嗟に隆慈は何かを言いかけたが、質したい事項が脳裏を錯綜し、
「ピュアチヨコあった〜」

完全に、
発言のタイミングをなくしてしまう。背から、幼い声が飛んできた
からだ。

「ねえ、ふたつ買ってもいいーい？」

「ひとつにしなさい」

振り返るまでもない。

母娘おやこによる二人だけの会話は、じゃれあうように続いている。

レジの方へ歩く灯は一度だけ振り返り、通路に微笑を寄越す。

商品を手に行っている場合、レジを経由しなければ店内から出られない。常識だ。

「あのさ！」

訊きたいことがある。引き止めなくては。

そんな欲が、隆慈の声を増幅させた。

が、

「忘れてた！」

立ち止まった灯は、可憐に半身を反し、

「黒猫さん。大人しくしてる？」

隆慈の声を掻き消した。

「……あ。いや、フッー。だけど」

「そ。仲良くしてね」

隆慈の渾身の意は、どうやら一蹴されたらしい。それだけ言って、灯は歩行を再開する。

「待つ……………」

先程の、通話中の携帯から漏れた音声。もしかしたら、聴こえなかった“フリ”だったのでは？

つんのめる隆慈は、思考の海面から浮上した根拠のない憶説に脚が踉む。

まさか…………な。

バカバカしい。

今日は金曜。

帰宅した隆慈は、週末に備えて多めに仕入れた食材を冷蔵庫に貯蔵していた。足回りにスフレが躰を擦りつける。

「お……」

スフレなど眼中にない。携帯の着信に、だ。
軽い日常的な動作で確かめて見ると、
やはりメールだった。

題>義兄様と会った？

本文>電話で聞いたわ。仁朗さん。今、ドラマの現場監督してるんですってね。しかも新潟で。

『宿泊はどうするの？』

律儀に訊いたのよ。そしたら、

『例え義理の兄妹でも万が一がある。お金の心配は要らない』って。
私は今の今まで仕事中なんだけど、もうビックリ。

下品でしょ？

とまあ、粗末な話は帰ってからするから、それじゃあね。

返信はしなくても済みそうだ

階段を上がったあと、隆慈は察する。

それにしても、叔母が用件をメールで伝えるとは、甥の隆慈には新鮮だった。ちょっとだけ、だが。

一階から、
「フニヤー」

とスフレの鳴き声。

他の猫と変わらぬ音韻だ。隆慈は聴きながら、再認識する。

不意に感性が刺激され、窓に目を遣ると

夕映えの効果で、

まだらな雲が朱色に染まっていた。

悪くない。

そう思い。隆慈はラフに破顔してみた。

『謝礼は随意。されど尽力の限り
』

訝りたくなるほど胡散臭い看板を遠目で見つけ、白樺宥夜は無意識

に歩調を速めた。

礼金を客に委ねて、どうやって収支を賄ってるんだよ。爺さん。

軒先の看板と対面するたび、宥夜はいつも敷衍^{ふえん}を求めている。

「いつそのこと訊いてみるか」

呟き、宥夜は横断歩道をその名称に従って“横断”する。独り言は、街の雑音に紛れて霧散したようだ。

夕刻の街は

消化を行使する蠕動^{ぜんどう}のごとく、忙しくうごめいていた。

有限会社メリーメリー。

それを会社と主張するのは、休日限定して釣りを嗜好する人物が、自らを漁師と名乗るようなものだ。

規模の問題ではない。是非を問うのは意志だ。

「はあ、面接：ですか？」

会社　否、事務所の談話スペースで、斎藤善則は社の長と向かい合っていた。

「茶が出せんで悪い。秘書が外でな」

「いえ、お構いなく」秘書が外出中?!　有限会社って、そんなもんかな？

見てくれは慇懃いんぎんな対応をこなす斎藤は、初老を五も六も跨いだかのような社長の腑抜けた言動に、少なからずの不信感を募らせていた。

大丈夫かな？

茶の代わりに、と勧めれたグレープジュースを社交の心構えで喉へ運びながら、斎藤は手にしたブドウの果汁のように濁った未来を案じる。

こっそり奥を盗み見ると、書類らしき紙で散らかったデスクの側で、社長の後ろ姿が確認できた。契約書でも探しているのだろう。

斎藤の第一印象では、体躯、服装に変哲はない。歳を感じさせる白髭は、しかし地味だ。オシャレの一言であっさり許容できる。ホームレスの印象とは相違に思えた。

肥えている訳でも、痩せている訳でもない。いたって健康そうだ。

道理ある観察を斎藤が続けていると、

呼び鈴の旋律。

社員か依頼人。あるいは単なる知人の訪問か。

「客かもしれん。相手してくれ」

奥から、焦燥の混じった声が跳ねた。

「僕がですか?!」

コップを置きながら、斎藤は拒否に等しい言葉を、奥に返す。

「だって、僕はここの」

「本日をもって、お前さんを『メリーメリー』の正社員として起用する。満足かな?」

「はあ……………」勝手に起用されても…………。

斎藤は、愛想笑いと共に身に染みた苦笑いを浮かべ、言葉に詰まる。しかし、時間は待つてくれない。容赦なく呼び鈴は催促を続ける。

社長の了見は知れない。でも、自分は試されているのかも…………。そう、斎藤は妄信することにした。

萎縮した脚に血液を送り、直立。口元にグレープが付着している蓋然性を危惧して、時計のない右腕で拭ったのち、

「今、行きます!」

と催促に応え、斎藤は玄関へ急ぐ。

男のシルエットが視界に入り、手動ドアに向かって数歩、歩いたところ

「爺さん。さすがにこれはないんじゃないか」

勢い良く扉が開いた。

若い男の呆れた声と、ほぼ同時に。

モザイクのように滲んだ『扉』は、佇立する人物の全貌を観察者に把握させるには不都合だ。例えば、その人物が世間的に広く認知されている者であつても、障壁を掃く事前に観察者が人物を識別することとは、安易ではない。

白樺宿夜！？

玄関が開けっ広げになったことで、初めて斎藤は認識する。カリスマ氣象予報士の白樺宿夜だ。と。

「あんだ、誰？」

斎藤の視界を陣取る宿夜は、無骨に尋ねた。

テレビでの愛想は微塵も感じさせない口調と面持ちで……。

異常なまでに気まずい空気に、斎藤は、

「そんな、名乗るほどの者じゃ……」

得意の愛想笑いで応戦する。それしか、有効な手立てはない。

「それ、ジョーク？　ジョークだったら笑うけど。演技でOKなら」

蔑んだ態度で、宥夜は笑顔を作ってみせた。

「いやいや、ホントに名乗るほどの者じゃ……」芸能人って、こんなもんかな？

白樺宥夜の年齢なら承知している。自分より三つも年下ではないか……。

斎藤は、舌打ちを露骨にキメてやりたい心境だった。

「宥夜か。灯は居んぞ」

斎藤の背後から、腑抜けた声。

それに対し、玄関で立ち往生する宥夜は、

「おでかけ？　秘書じゃなかったっけ、あいつ」

所在ない斎藤は、背に近づく老人に助けを求める。

一度は視線が交じり、すぐに逸らされ、

「新潟は寒い。東京の土産でもあるろうに。茶が良いの」

「ムリ言つなよ爺さん。そもそも俺らは親類じゃないんだ。いくら妹が世話になってるからって、んな義理はない」

「言つな。わしはオマエたちを親類以上だと思つとる」

会話は続行された。

「親類つて言やあ一縷は？　社員なんだろ？　あれで」

「一縷は塾か図書館。

あやつとて、勉強はしておる」

渋い顔で顎を擦りながら、社長は話す。

「どうやら一縷は“えすぱー”でなかったらしくての。本人は読心術と申しおった」

「あー、それか。灯に教わったんだな。……たぶん、あいつの直伝だ」

宵夜は何かを悟ったように、口を緩めた。

「ほう、直伝　とな」

社長も、真似るように口元を緩める。

「……………」

斎藤を独り現つ世に取り残し、二人は何やら彷彿している様子で、天井を仰いでいた。

「あのお……僕は？」

耐えられなくなった斎藤は微衷^{ひちゅう}を晒す。

声に反応し

中間に佇む斎藤を黙視する二人。

『……誰？』

声は、絶妙にハモった。

第二之譚：滑稽なる茶番と裸一貫（1）（後書き）

副題の『裸一貫』とは、資本（事業の基）が躰のみの状態ですかね。別段、低俗な意味を示唆している訳じゃありませんので、悪しからず。

第二之譚：滑稽なる茶番と裸一貫（2）

【 2 2 】

人通りの少ない昼とは対照的に、夜は外食に赴いた家族連れで賑わう、陰日向な性格の繁華街。
その一際寂れた一角で、白樺灯は家主を待っていた。吊した両手には、スーパールの袋。

「卯月さん。居ますか！。

食材、調達してきました。入れてください」

返事がない。

「！」

錆びついた音をたてながら、灯の視界に和風な玄関が展開する。見るからに因業そうな初老の女の、半ば呆れた表情と共に……。

「…なんだい」

女はつつけんとんに言い、前髪を掻き上げた。

ほほえんだ灯は、スーパールの袋を持ち上げ、

「夕飯、わたしが支度しますね」

「また、静香かい？」

「いいえ、今日はわたしの勝手なお世話です」

灯は嘘をついた。依頼人は静香という女性だ。でも、今となつては眼前の彼女が、灯の依頼人だ。
約束は、先週にした。たちはなつつき橘卯月と……。

「…入りな」

「はい」

女 橘卯月は、自分の半分の歳月も生きていない赤の他人である娘を、自分だけの“城”に招き入れた。

殺伐としている

初めて足を踏み入れたとき、灯の第一印象は率直なものだった。けど、今日は違っていた。

片づいてる？

旅館の面影を残す長い渡り廊下を足早に歩む卯月。背を追う灯は、言葉を選びつつ卯月とのコミュニケーションを図る。

「驚きました。キレイですね。廊下、長いのに」

「……掃除だよ」

振り返らずに、それでいて感情を込めずに、卯月は話す。

「アンタにやられちゃ癪だからね」

「あ、ゴメンなさい……。今度来たとき掃除しようかなって、思ってた」

申し訳なさそうに、灯は白状した。

「馬鹿かい？ アンタは。…どうやら、世間擦れてないようだね。」

鼻で笑ったあと、

「そうゆうことは言わないに限る」

「そうなんですか？ 後生の為になります」

「後生？ 若いのに、小憎たらしい措辞だね」

皮肉っぽく言った卯月に、灯は天井を仰ぎながら言葉を返す。

「措辞……？ ああ、言葉遣いですね」

無視したまま歩く卯月は、私室らしき居間の前で立ち止まり一瞬だけ灯に視線を飛ばし、

「台所はあっちだよ。好きにしな」

灯の視線を台所の方角へ誘導した。

「はい。好きにさせてもらいます」

「…ふん」

再び鼻で笑ったあと、卯月は襖の中に姿を消した。残された灯は考える。

施設　入ってくれるのかな？

依頼人が当社に期待しているのは、持病を患っている母親を宰領の庇護下に入れること。
しかし、卯月は主張する。『まだアタシは若い。自治体の世話になどならん』と。

灯も、卯月の主張には共感していた。
持病がどんなものかは知らないが、外見上、卯月は艶さえ感じさせるほど若々しい。それに、元々は女将だ。長年付き添った旅館をそう易々と手放せる訳がないではないか。

板挟み。

友人に送ったメールで『明日には片づくかな？』と、自分自身に帰着を仄めかしてはいたものの、どうやらこの件は一筋縄ではいかなそうだ。じっくり腰を据えて向き合わなければ……。

床にうなだれるスーパールの袋を万有引力の束縛から乖離させた灯は、カツオブシの薫りが芳しい台所へ、躰の“向き”を換えた。

まず、台所と向き合わなくちゃ

半日を各地の周遊に費やした太陽は、一日の始まりを告げるべく、新潟の街を照らしていた。

厳密には、地球が太陽の周りを運行しているのだが、吟じる風情に厳密もくそもない。

例のごとく洗面所で洗顔を終えた隆慈は、鏡に映った白い顔の妖怪の魔力で、軀の機関全体の信号がレッドランプに明滅しているかのような錯覚に捕われた。

「なあッ！！？」
叔母さん??

隆慈はすぐに解った。美顔パックだと。

「朝から元気が良いのね。結構ケッコウ、コケッコウ」
悲鳴じみた隆慈の声を軽く受け流し、叔母は頬に手をあてる。

「それ、流行ってるギャグ？」

苦笑のまま、隆慈は質してみた。

「あら、知らないの？ 若手ピン芸人『オムレッツ吉原』の持ちギャグよ。勉強が足りないわね」

「あつそ」

隆慈はタオルで顔を拭きながら、

「親父からの言伝ことづて……だろ」

「さすが私の甥ね。そうよ。伝言」

片手の甲を腰にあて、叔母は話し始めた。

「仁朗さん。朝から撮影らしいの。でね、『お前を説得させてみせるから来い』って伝えてくれって」

口真似は必要なのか……？

疑問を口にはせず、鏡に反映された叔母の目をしかと見て、
「了解。行くよ。説得されに、じゃなくて、決着をつけに」と、決意を表明。

「利口ね。さすが私の甥」

意味不明な言葉を捨て、叔母は躊躇なく服を脱ぎだした。
俗に言う“朝シャン”は叔母の日課だ。

鏡越しで脱衣をおっぱじめたお笑い通のOLに、隆慈はつつこむ

「つか、脱・ぐ・な」

あれ以来、五十嵐との連絡は途絶えている。いわゆる消息不明だ。隆慈は厚手のジャケットから携帯を取り出し、確認。

着信は数件あった。

が、そこに五十嵐の名義はない。

おれが気にすることじゃない……か。

携帯をジャケットの内に潜らせた隆慈は、午前中のとりあえずの目的地向かって、いつになく単調な歩行を再開した。

雲隠れになっていた父親との決着

それは、今の隆慈にとって最優先事項だった。

嫌われているというのに、木枯らしは性懲りもなく隆慈の躰に吹きつける。

「寒い」

一言に、風は治まった。

「あ?! 風やんだ」

赤いハッピの少年は、呟いた。

地を蹴ってしなやかに身を翻し、

「誰かが僕たちのうわさとかしてたり？」

喋りながら、後ろ向きで歩く。

「その場合、わたしか一縷のどちらかが『はつくしよん』ね」

金粉を全身に塗したかのような毛色の大型犬を従えて歩む淑女
灯は、少年を諭す。

「前見て歩く」

腕を頭の後ろで組みながら歩く氷室一縷は、
ひむろいちゆ

「だゝよねっ」

目の形を三日月に模して戯けてみせた。

曲がり角に差しかった辺りで、

「危ない！」

灯が危険を知らせる。

「え？」

が、遅かった。

どん！！

物体と追突。

エレベーターが上昇し初めた刹那に似た、重力感。次に、司令塔から四肢に防衛本能が疎通され、遅れて

「いつつう……」

緩和されることなく感覚組織に直下した、鈍痛。

痛いつてば！

「大丈夫！？」

声と共に足音が近づく。灯とクラウドディアだ。

「僕はへーきだけどき、ぶつかったひとは？」

「えっと……、大丈夫みたい」

呻き声の方を観察している灯は、一縷に簡潔な情報を伝えた。車による交通事故ではないのだ。即死も悶死もありえない。

じんじんする尻を労りながら、一縷は規則正しい順序で起き上がる。先程のしなやかさは、もうない。

クラウドディアが体軀を揺らして、のしのしと歩み寄ってきた。

「ああっ、す、すみません」

男はこちらを見向きもせず、カメラに故障がないか躍起になって点検している。

「ああ……、良かった」

付近で眼鏡が割れていたが、そちらには気にも留めない。

「いたいけな美少年より、カメラのほうが大事？　僕、不満」

高級そうなカメラを撫で続けている男に対し、一縷は遠慮なく愚痴をぶつけた。

「一縷。初対面の人にそれは無礼よ。

……謝ったら？」

「僕にあやまってほしいよ。痛かったし」

言って、一縷はクラウドディアの頭に触れ、

「こらしめちゃえ」

命令。

クラウディアはあくびで応える。

車が二台。連なって脇を走る。

「あ……ごめん。俺、地面とか見てたから」
割れた眼鏡をひょいと拾い、男は言った。

「いえ」

微笑を作る灯は、傍らで男に視線を刺す一縷の肩に手を置き、
「この子に非があるんです。なんたって、後ろ向きでよちよち歩いてたんだもの」

「僕は歩くとき『よちよち』なんて効果音しないよ」
上目遣いに灯を見据え、即座につっこむ一縷。

「……………」
年格好から二十代後半と想定できる男は、微笑中の灯を黙視している。

なんだよこいつ。アカリお姉ちゃんを見すぎ！
……キモイ。

一縷は男を睨んでやった。びしっと。
換言するなら。忠誠心の薄れたクラウディアの代わりに、威嚇を食らわせてやった。

「さ、行こうか」

垂れたリードを巻きながら、灯は促す。

「早くしないと、撮影の休憩時間、終わっちゃうよ」

「あ！　じゃあ、俺はここで……」

言う男は、もじもじと道を譲る。

滑らかに灯に手を取られ、しかたなく

「そだね」

一縷は賛成した。

いくらか歩いたのち、手から伝わる灯の体温に満足しつつ、一縷は
気になって後方を振り返る。

割れた眼鏡の男が、恨めしそうにこちらを見つめていた。

二日間のうちに著しく活気づいた学区内に、並木隆慈は居た。
精確な緯度経度は不鮮明だが、そんな細かいことなど誰一人として
意識していない。隆慈には無視できる詳細だ。

「並木道でのカットは諸々の事情で後回しにしてな。今日は朝から校舎内で撮らしてもらってるんだ」

授業あつたらどうする気だつたんだ？

今日は、土曜だから良かったけど……。

自慢げに話す並木仁朗は、豁然とも言い難いバックスクリーンを両腕で独り占めするように、

「主人公が昔やんちゃして面倒かけた高校教師が、その並木道で組織の人間に射殺されてな。それで主人公の三宅と助手の桜が、数年前に何らかの裏事情で廃校になった校舎で手がかり足がかりを探す。

てな設定なんだが。これがまた

」

廃校？　ここ、まだ現役。つか、逆に新しいし……。

話は延々と連鎖し、しばらくして隆慈は、父の男優じみた声を遮断する“コツ”を会得した。

慣れてきたところで、隆慈は周辺を洞察する。

教職員の利用する駐車場が近い。今は、おびただしい数のベンツが占拠している。暖房が利いた車内で待機している者も。役者だろうか？

素人の隆慈には用途の掴めない機材が、そこらかしこに分布している。至近では、ジーンズ姿の男たちが手持ちぶたさに煙草をくわえ

ていた。中には、女性も幾人。
校内へのアクセス経路である玄関には、『関係者以外 立ち入り
禁止』のテープ。こういったケースでは、教職員や生徒は関係者に
含まれるのだろうか……？

無意味で無意義な考察から離れ、隆慈はテントに常備されている麦
茶を一気飲みした。無論、コップを介して。
未だ、並木監督のお喋りは継続していた。そろそろ、シナリオの枢
軸に触れそうだ。

「でな、溝淵の言葉に血走った三宅は胸倉を掴むんだ。こう、
ぐいってな」

熱弁する並木監督に不用意な接近を試みた若僧ADが、問答無用の
相克関係を顕示された。

「か、監督……。放してください」
心も臍も脆弱そうなADが、自由を切願する。

「おお、スマン。つい熱を帯びてな。悪い」
言ったあとで、監督はADを解き放つ。

ADは去っていった。何しに接近したのだろうか。軽率だ。

ほとぼりが冷めたと判断し、隆慈は話を切り出す。椅子に深く癒着

した姿勢で、遠くを眺めながら。

「……どこに居たんだよ。六年間」

横向きのまま顔だけ監督　否、親父に寄越し、

「母さんは？」

「別れた。離婚」

ぶつきらばうに事実を宣告した親父。

隆慈は、

「……………」

無言。沈んでいる訳ではない。

解析困難な表情を息子に向け、並木は、

「おいおい、驚かないのか？　父さん。驚いて欲しいな」

「たぶん、そうだろうと思っていた。四、五年前から連絡ないし……」

それに「

隆慈は言いながら、視線を再び虚空へ。

「あの性格だしね」

「なんか湿っぽいな。フィルムを回せば、それなりの画^えになる」

並木は父親としてではなく、ドラマ撮影の現場監督として言った。

「……………あつそ」

隆慈は並木監督の言葉に、使い慣れた辛辣な相槌。

沈黙。

やがて、父、並木仁朗が口を開いた。

「父さんの半生は、要約すると“疎略”だ。

株券の不正売買。仁義の道を踏み外した父さん　いや、俺は、非行を咎められるのを、あるいは法に裁かれるのを畏れて、逃避したんだ。新潟こじちにな」

並木は隆慈の横顔を窺いながら続ける。

「母さんとお逢い。お前が産まれたのも、直度その頃だった……。保身を図ったんだ。俺は」

カッコつけやがって。何が『保身を図った』だ……。

息子の胸裏を知ってか知らずか、並木は渋さを強調した声色で、
「で、平穏な日々を獲得した訳だ。十一年間分は、な」

語る。

第二之譚：滑稽なる茶番と裸一貫（2）（後書き）

ようやく、一本の筋が通りそうです。本格的な一流ドラマを多分に意識しているので、無軌道かつ支離滅裂にならないよう気を配っているんです。小説家としての才能は未開拓ですが、“フィクション”は熟知しています。ご心配なく。シナリオ展開の技量には、きっと目を見張るものがありますよ。応援しながら陶醉しちゃってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4398c/>

メリーメリー X'm a s

2010年10月28日07時01分発行